DEEPRISING

Prologue

西暦2071年・・・

全てを捕食する「オラクル細胞」により誕生した怪物
「アラガミ」により人類は滅亡の危機に瀕していた

捕食した対象の性質を取り込む能力を持つオラクル細胞が集まり
形成されているアラガミには通常の火器では
全くダメージを与えることができず
人類はアラガミに対して
有効な手段を持つことができないまま奴らに捕食されていった・・・
しかし、「フェンリル」と呼ばれる企業が開発した
「神機」と呼ばれる兵器により人類に僅かな希望が見え始める・・・
神機とはアラガミと同様にオラクル細胞で構成された兵器であった
オラクル細胞の特徴を研究した結果、
オラクル細胞同士ならば
有効なダメージを与えられることが判明したのだった
これを利用して生み出された兵器こそが「神機」であった・・・

神機を生み出し人類の守護者としての地位を確立した「フェンリル」は
全世界において
絶大な権力を持つ組織へと成長していったのだった・・・

そして・・・場所ははるか極東の大地・・・
かつて日本と呼ばれた場所は「最前線」とも呼ばれるほどに
多くのアラガミが生息する危険な地域とされていた・・・
しかし、神機を操る「ゴッドイーター」達の活躍により
激戦地とされながらも
極東の地は他の地域と変わらないほどに安定を保っていた
その平和は優秀なゴッドイーター達がいたからこそ　辿り着けた平和であった

当然だが、優秀なゴッドイーター達の極東支部での人気は非常に高かった・・・
女性市民たちから圧倒的な人気を得ている「リンドウ」「ソーマ」
彼らが市街地を歩けば多くの女性が集まるほどであった・・・
「こりゃあまいったな・・・。」
「・・・・・・・・・。」
まんざらでも無い様子のリンドウと明らかに不愉快そうな表情を浮かべるソーマ

しかし
彼らの人気も女性ゴッドイーターたちに比べれば小さなものであった
市街地に突然大きな声と共に歓声が上がる
「な・・・なんだ・・・？」
「・・・・・・・・・？」
唖然として様子のリンドウとソーマー

声の先にはゴッドイーター 「サクヤ」「アリサ」の姿があった
豊満な乳房を揺らし露出の高い服装で市街地を散策する二人・・・
その整った美しい顔立ちと、
引き締まった抜群のスタイルに魅了されない男はいない
二人の周囲には多くの男達が群がり握手や写真を求る・・・
『本当に・・・いつも何なんですか・・・この人たち・・・？』
男達の馴れ馴れしい行動に不愉快そうなアリサ
「いいじゃないアリサ、こうやって感謝されるのも悪くないわよ？」
『あまり感謝されている・・・という感じはありませんけど。』

命懸けで戦うゴッドイーター達に
周囲の男達は当然　感謝の気持ちを抱いてはいたが
目の前にいる美女達の姿に完全に魅了されている為か
不真面目な態度にしか見えない

「サクヤさんお疲れ様です、肩を揉んで差し上げますよっ！」
「えっ！？　別にいいわよ、そんなことしなくてもっ！？？？」
「アリサ様、足を揉みほぐして差し上げます！！！」
『ちょ、触らないでください！！！？？』
必死に二人に気に入られようと媚びる男達・・・

「なんだよ・・・この扱いの差・・・。」
「・・・・・・・・・。」
サクヤとアリサのすぐ背後で佇む・・・
同じゴッドイーターである「空木レンカ」と「藤木コウタ」
女性ファンに囲まれるリンドウとソーマ・・・と
男性ファンに女神のように扱われるサクヤとアリサ・・・
「おかしいだろっ・・・俺たちだって命懸けでやってるんだぞっ・・・！？」
「・・・・・・コウタ・・・悔しいが・・・諦めろ。」

ゴッドイーターとしては優秀な二人であったが
アイドル並の人気を持つ他のメンバーの前では
全く目立たない存在となっていた
そんな現状を受け入れ、
遥か遠くを見つめるようにアリサたちを見つめるレンカと
現状を受け入れることができず　もがき苦しむコウタ・・・
いつの間にか二人は
サクヤとアリサのファンの群れに紛れ込み見えなくなっていった・・・

極東支部長室・・・

「それで・・・話とはなんだねツバキ君？」
「シックザール支部長・・・。」
極東支部　支部長ヨハネス・フォン・シックザールの元を訪れた
指揮教官　雨宮ツバキ
彼女は支部長に対してゴッドイーター達の人気が
任務に与える影響について意見を述べていた
「・・・つまり・・・現状は好ましくないと言うんだね？」
「はい、この状況が続けば必ず任務にも影響が出ると思われます。」
ゴッドイーターとして私生活においても厳しく管理するべきだと提案するツバキ
特に市民達からの声援について規制を設けるべきだと提案していた
「たしかに・・・君の意見には一理ある・・・・しかし。」
支部長はフェンリル本部からの指令をツバキへと伝えた・・・
「え・・・本部からですか？」
「その通り・・・これに背くことはできない・・・。」
「私は反対です・・・ゴッドイーターに密着取材など・・・
任務に影響するどころじゃ・・・。」
「もちろん、危険な任務に密着させはしない・・・
密着する記者に何かあっては困る。」
「・・・・・・・・・。」
「これは本部からの命令だ・・・ツバキ君。」
「わかりました・・・。」

極東支部アナグラ　会議室
「皆よく集まってくれた・・・これから大事な話がある。」
ツバキにより集められたゴッドイーター一同・・・
「どうしました姉上・・・そんな表情あまり見たことがありませんが・・・。」
「うるさいリンドウ・・・お前は黙っていろ。」
「へいへい・・・。」
リンドウが心配するのは無理も無かった
ツバキの表情は固く、未だ自分の中でも納得ができていないのだった

「密着・・・！？　ですか！？？」
「マジッすか！？　テレビに出るんですかっ！！！」
ツバキの話を聞き、喜ぶコウタだったが
ほとんどのゴッドイーター達はコウタとは対照的な反応を見せていた

「ツバキさん・・・それは・・・危険かと思います・・・。」
『密着だなんて・・・いくらなんでも・・・無茶すぎます。』
任務の危険性を訴え、密着する記者の安全を配慮するサクヤとアリサ

「邪魔なだけだ・・・。」
「・・・・・・・・・・・・・・・。」
ソーマの一言に同調し無言のまま語ろうとしないとレンカ

「姉上・・・いくら何でも無茶ですって・・・死人が出るかもしれませんよ？」
「わかっている・・・だがこれは上からの命令だ。」
全員がため息をつき重い空気に包まれた会議室・・・
最初は喜んでいたコウタも冷静になれば
仲間達が言っていることが正しいということに気づき
いつの間にか椅子に座りおとなしくなっていた・・・
そして・・・
極東支部へと降り立つ一機にのヘリ・・・
本部から依頼された民間の記者が乗っているという・・・
不安な表情を浮かべ　ヘリを見つめるゴッドイーター達・・・

Episode 01

フェンリル本部からの命令により
密着取材を受けることになったゴッドイーターの面々
数人の記者が極東支部へと訪れ密着を開始していた・・・
ほとんどの記者が礼儀正しく誠意を持って
密着し自分の立場をわきまえていたが
その中に一人・・・どこか怪しい行動を取る男がいた
『きゃあっ！？』

「す・・・すみません！！！」
『あなた・・・今スカートの中撮影しようとしてませんでした！？』
「そ・・・それは誤解です・・・私は決してそのような・・・！！」
アリサのスカートの中を盗撮しようとした中年の男・・・
本部から派遣された民間雑誌の記者であり
アリサ　サクヤの担当となった人物であった
一見すると真面目であり紳士的な態度をとる男であったが・・・
どこか危険な香りのする人物であるとアリサは感じていた
密着取材の為に
アリサとサクヤの背後を
ストーカーのように付け回していた男だったが
その視線はどこか二人の乳房やスカートの中に集中している気がする・・・

『はぁ・・・もう・・・うんざりです・・・。』
密着が始まって僅か2日であったが、既に疲れきった様子のアリサ
「本当に・・・密着されることがこんなに疲れるとは思わなかったわ。」
サクヤもアリサ同様に疲労した様子を見せていた
『サクヤさん・・・あの記者・・・どう思います？』
「・・・うん？　なにか気になることでも？」
『いえ・・・そのなんというか視線が・・・おっぱいばかり見ている気がして・・・。』
「それは・・・あの記者だけの話じゃないとは思うけど？」
『た・・・たしかにそうですね。』

改めて考えてみれば、市街地で出会う男達は
誰もが自分の乳房を凝視している・・・
アリサ自身も豊満であることは自覚しており
それが男達の興味を惹いていることもわかっていた
『でもカメラを抱えた人に追いかけられるのは違いますよっ！』
「それはそうね！　もしあの記者がなにかおかしな真似をしたら・・・
容赦しちゃダメよ！」
『もちろんです！』
密着記者がいる光景に慣れない違和感を感じものがほとんどであったが
数日も続けばその光景は慣れたものとなり
アリサ自身も感じていた危険な香りは気のせいだったと思うようになっていた

そして翌日・・・

「さて、今回の任務内容だが・・・」
ツバキに任務内容を告げられる
リンドウ　レンカ　アリサ　の3人・・・そして・・・密着記者の男・・・総勢4名
「あくまで偵察任務だ・・・危険を犯す必要はない。」
危険の少ない任務ということで記者の同行が許可されていたが
アリサを始めとするゴッドイーターの面々は明らかに不愉快そうであった
危険の少ない任務とはいえ一般人が同行するなど初めてのことである
一般人が同行することで3人はどこか緊張の色を隠せない様子だったが
誰よりも緊張していたのは・・・記者自身であった
足が震え顔色は青ざめていた
「なぁ・・・あんた無理しないほうがいいんじゃないか？」
「い・・・いえ私の仕事ですから・・・。」
リンドウの問いかけに応える記者の視線は定まらず視線が泳いでいた
「・・・こりゃ・・・大変な一日になるな・・・。」
「・・・・・・。」
『・・・・・・。』

「予想よりも天気が早く崩れそうだ・・・早いとこ終わらせよう。」
『了解です。』　「了解！」
「・・・・・・・・・。」
リンドウ達の任務は周辺のアラガミの調査・・・
極東支部には衛星からの情報やレーダーにより
周辺のアラガミの情報が細かく送られてくる・・・
しかし、そんなハイテク機器を用いてもどうしても生まれてしまう死角が存在する
そういった地域は基本的に危険地帯とされているが
長年のゴッドイーター達の活躍により
死角地帯においても比較的安全な地域が判明しており
そういった場所にはゴッドイーターが直接出向いて調査を行なう
今回リンドウ達が調査に向かう地域も比較的安全な地域とされており
記者の密着が許されたのであった
しかし・・・

「ひぃっ・・・アラガミだっ・・・殺されるっ！？」
アラガミ「オウガテイル」が現れただけで悲鳴を上げる記者・・・
「まったく・・・こんなんでよく密着しようなんて考えたものだな・・・。」
『良い迷惑ですね・・・。』
一般人にとってはオウガテイルといえど大きな驚異であることは理解していたが
密着を決意した記者のあまりにも情けない態度に呆れた様子のアリサとレンカ・・・
「これが一般人の普通の反応だ・・・俺たちゴッドイーターの方が異常なんだ。」
『えっ・・・！？』
「・・・・・・・・・。」
アラガミには神機でないと立ち向かうことができない・・・
それを持たない一般人にとってアラガミはまさに不死身の怪物であり
オウガテイルであろうとヴァジュラであろうと・・・同じである
ゴッドイーターにしか解らないアラガミの強さ・・・
その感覚は既に一般人の感覚とはかけ離れたものであった
『・・・・・・。』　「・・・・・・。」

「記者さん、休んでいる暇はないぞ・・・。」
オウガテイルが倒された後も腰が抜けたように座り込んだままの記者に
リンドウが立ち上がるように促す・・・
「すみません・・・腰が・・・抜けてしまいました・・・。」
「・・・・・・・・・マジかおっさん・・・。」」
「・・・・・・。」
『はぁ・・・・・・。』

「リンドウ・・・すぐにでも避難する場所を探さないと。」
「だな・・・回収ポイントまで戻っている時間は無さそうだ。」
今にも天候が崩れそうな空を見つめるレンカ・・・
『でもこの辺りに避難指定場所は無かったはずでは・・・？』

極東支部では任務中のゴッドイーター達にトラブルが起きた場合に備え
各地に物資を保管した小さな避難場所を設置していた
任務に出動する際には周辺の避難所の場所を確認しておくのも
ゴッドイーター達には重要な仕事であった
そしてアリサの言う通り、彼らがいる地域には避難場所が用意されていない・・・

「う～ん、やむを得ない・・・あそこに向かうか・・・。」
『あそこ？』
「安全な場所があるのか？」
「まぁな・・・まっ、この記者に知られても問題はないだろ・・・。」
リンドウの台詞の内容が気になったが・・・彼に従い移動を始めるメンバー
足を痛めた記者に肩を貸すレンカの表情は固い・・・
そして・・・辿り付いたのは
山間に開かれた集落・・・
『えっ・・・ここは？』
「・・・・・・人が大勢いる・・・？」

そこには大勢の人が暮らし自給自足で生活をしていた
しかし、集落のあちこちにはフェンリルの紋章が刻まれた箱が置かれており
この集落がフェンリルの支援によって運営されているようだった
レンカとアリサはここがどういう場所なのかすぐに理解できた

極東支部には大勢の市民が壁の中で安全に暮らしているが
外にいる全ての人間を受け入れることはできない
極東支部で暮らすには厳しい審査基準があり、
それを満たさなければいけない・・・
レンカやアリサも支部から追い出される市民達の姿を幾度も見てきていた・・・
この集落はそんな人々が寄り添い助け合い成り立っている場所であった
「フェンリルが・・・支援をしているのか？」
「まぁ・・・限界はあるがな。」
『・・・・・・すごい・・・壁の外にこんな場所があるなんて・・・。』
「人口はどこくらいいるんだ？」
「100人少々ってところだが、徐々に増えてる。」
『・・・・・・。』

フェンリルの物資を外部に支援するのは基本的に禁じられている
そういったルールを破りながらも支援を続けているリンドウの存在に
改めて感心させられたレンカとサクヤであった
同時にこんな大切な場所に、
記者を連れて来て大丈夫なのかと心配になる二人だったが
記者の興味は集落には無く、常にアリサへと向けられていた
改めて記者に対して不愉快な気持ちを抱くアリサであった

天気が崩れ始め雨が降り始める頃・・・
リンドウは住民達と親しく会話するとすぐにアリサ達が休める場所を用意した
「レンカと記者のおっさんはあっちの建物・・・アリサはそっちな。」
『ありがとうございます、リンドウさん・・・。』

「行くぞ・・・おっさん・・・。」
「す・・・すみません・・・。」
レンカに連れられ歩き出す記者・・・

極東支部に入れなかった人々の集落・・・
しかしそこに住む人々は優しく思いやりに溢れていた
「ゴッドイーターさんお疲れ様、お風呂用意してあげるわね！」
『あ、ありがとうございます！！』
リンドウ達一部の極東支部のメンバーから支援を受けていることや
命を掛けてアラガミと戦うゴッドイーターの存在は
彼らにとっても希望であったのだ
『よかった・・・まさかお風呂に入れるなんて・・・。』
アリサは服を脱ぎ捨てゆっくりと湯船に浸かっていた・・・
この数日・・・男に付け回され気の休む暇も無かったアリサ・・・
記者のいない場所でようやく羽を伸ばすことができ
身も心も僅かな安らぎを得ていた・・・

しかし・・・その時・・・
突然の地響きと共にアリサの耳に聞こえた雄叫び・・・
『な・・・なにっ・・・！？』
全裸のまま湯船から出るに出られないアリサ・・・
「アラガミだっ・・・！！？」
「みんな避難しろぉっ！！！」
建物の外から聞こえてきた声はアラガミの襲撃を知らせていた
『あっ・・・あぁぁっ・・・・！！！！？？』
無防備な全裸のまま一人取り残されたアリサはパニックに陥っていた・・・
それは・・・アリサの遠い過去のトラウマ・・・
自分の不注意から両親がアラガミに襲われてしまったあの日の記憶・・・
目の前でアラガミに食い殺される両親の姿を目にした・・・
あの時、焼き付いた記憶がアリサに蘇ってきたのだった
『あぁぁ・・・パパ・・・ママッ・・・・・・・助けてっ！！？？』
アリサは湯船から立ち上がることもできないほどに怯えていた
神機を構えアラガミと戦っていたアリサの勇猛な姿とは正反対であった
アリサの精神状態はあの日の幼い頃へと巻き戻ってしまっていた・・・

「レンカ！　アリサはどうした！？」
「あれから見ていない、まだ部屋じゃないのか？」
「まあいい、この程度の相手なら二人で十分だ！
　　アリサにはここを任せて俺たちは迎え撃つぞ！！」
「了解っ！！」
「記者のおっさん、あんたはアリサに状況を伝えてくれ！！」
「わ・・・わかりましたっ！！」

『あっ・・・・・・あぁっ・・・誰かっ・・・。』
アラガミと戦うリンドウとレンカ・・・しかしアリサは動けなかった・・・
そんなアリサの元へと・・・ゆっくりと忍び寄る影があった

『パ・・・パパ・・・？？』
アリサの目の前に現れたのは・・・見たこともない中年の男であった
『いやぁ、来ないでっ！？』
その男はアリサを見つめると嬉しそうな笑みを浮かべ
服を脱ぎ始め湯船の中へと入り込んできたのだった
『いやっ・・・触らないでぇっ・・・！？』
アリサへと抱きつきその豊満な乳房を揉む男・・・
「くそっ・・・ゴッドイーターなんて役に立たないじゃないかっ！？」
戦おうともせず怯えるアリサに怒りをぶつけ始める男・・・
「こんな女が壁の中に入れて・・・なんで俺が入れないんだっ！？」
『あはぁぁっ・・・やめて・・・なんでこんなことするのっ！？』

その男はかつて安全を求めて極東支部へとやってきていた・・・
しかし、男は基準を満たせず追い返され
長い間外を彷徨い、
ようやくこの集落を見つけ落ち付いた暮らしを得たばかりであった
そのためかフェンリルに対して
深い恨みを持っていたのだが理性で押さえ込んでいた・・・
しかし、ゴッドイーターとして優遇されながらも
怯え戦おうとしないアリサの存在を
目にし男の理性は吹き飛んでしまった・・・
フェンリルに対する恨みと感謝の狭間で
抑えていた怒りをぶつけるように男はアリサの体へと抱きつき全身を撫で回した

『あはっ・・・ママッ・・・助けてっ・・・！？』

「お前のような女が・・・お前のような・・・っ！！！」

強引にアリサの唇を奪い舌で口内をかき回す男・・・

少女のように怯えるアリサは抵抗することもできずに男に弄ばれる・・・

「ほら、立てっ・・・！！」

『いやぁっ・・・やめてっ！！』

男はアリサの尻を抱えると強引に肉棒を彼女の膣内へと押し込んでいった

『あはぁぁぁっ！！！！！？？？？』

『痛いっ・・・痛いよぉっ・・・パパァ・・・！！！！』
「はぁっ・・・はぁっ・・・はぁっ！！！」
男は息を荒げながら激しく腰を振りアリサを攻め続けていた

その頃・・・
「アリサさんは・・・まだ部屋にいるのでしょうか？」
カメラを構えアリサの小屋へと向かう記者・・・
「なんでしょう・・・なにか声が・・・？」
こんな状況で部屋で寝ているはずもないと思った記者だったが
小屋から聞こえて来た悲鳴に気づき・・・
そして・・・
窓から部屋の中を覗き込んだ記者・・・そこには・・・
湯船の中で激しく中年男と求め合うアリサの姿であった・・・
「な・・・なんだ・・・まさか・・・・・・！？」

『あはぁぁっ！！！！！！！？？？』
アリサの悲鳴が建物の外にまで響いていた
「あのアリサさんが・・・すごいっ！？」
記者の股間は大きく膨れ上がっていた・・・
想像を超えたスキャンダルな光景に思わずカメラを構える記者であったが・・・
「あんた何してるっ！？　早く避難しろ！！！」
突然背後から声をかけられた記者・・・
振り返ると・・・避難誘導を行なう住民の姿がそこにあった
「えっ・・・いやっ、私はっ・・・・・・！？」
「急げ、こっちだっ！！！」
「ま・・・待ってくれ・・・せめて1枚っ・・・・・・・・。」
記者は避難誘導する住民に手を引かれていった
その時の記者の顔はとてつもなく悔しそうな表情であった

しかし・・・部屋の中ではアリサと男の激しい交尾が続いていた
パニック状態のまま抵抗できないアリサを男は執拗に攻め続けた
『あっ・・・はぁぁぁぁぁっ！！！？？？』
「よし、お前みたいな役に立たない女には・・・たっぷり注いでやる・・・！！」
『いやっ・・・やめてっ・・・たすけてっ・・・・・・っ！？』
男の肉棒からアリサの子宮へと大量の精液が注ぎ込まれていった

『うっ・・・はぁぁぁぁぁつっっ！！！？？？』

全身を震わせるアリサ・・・

その表情は大粒の涙を流し怯えきっていた・・・

大量の精液を秘部から垂れ流し放心するアリサ・・・

「よし、ほら咥えろ・・・！！」

『あっ・・・はぁっ・・・うぐっ！』

喉の奥にまで男の肉棒を押し込まれるアリサ・・・
口の中に苦い精液の味が広がり苦しそうな表情を浮かべていた
「こいつ本当にゴッドイーターなのか・・・・・・！？」

その時・・・集落に大きく響きわたるサイレンの音・・・
「この音は・・・アラガミ撃退完了か・・・・・・くそ、いいところだが仕方ない・・・！」
男は精液に塗れたままのアリサを放置したままその場を後にした

『・・・・・・・・・・・・。』
精液に塗れ放心したままのアリサ・・・
彼女の心の奥にあるトラウマがより大きくなっていく悪夢のような一日であった・・・

Episode 02

極東支部が極秘に支援・・・管理する外部の街の存在
それはフェンリルにとって大きなスキャンダルであった
しかし・・・その街へ行き全てを見てきた記者の頭の中には
激しくセックスするアリサの姿しか無かったのであった
「ううむ・・・まさかあんな美女が・・・あんな男と・・・。」

今までの受けた印象とはまるで違うアリサの姿・・・
あれこそが本当の彼女の姿なのではないのかと記者は考え始めていた
そして記者として密着対象の本質を撮影したいと自然に考えるようになっていた
「美女ゴッドイーターの本当の姿・・・なんとしてもカメラに収めなくては・・・。」

『・・・記者さん、お疲れ様です。』
「ああっ・・・アリサさん・・・お疲れ様です！」
考え事をしていた記者の前に突然アリサがやってきた
『今回の任務は・・・すみませんでした、色々と予想外の事が重なって・・・。』
「いえいえ、それはこちらもよく解っています・・・！！」

アリサの様子は普段と何も変わらないように見えた・・・
もし男に強引に犯されたのであれば・・・もっと落ち込んだ様子であるはずだと・・・

立ち去るアリサを見つめる記者・・・
「ふうむ・・・落ち込んでいる様子も無い・・・やはりあれが彼女の本当の姿・・・。」

極東支部アナグラ　ラウンジ

「ところでアリサ、おっさんにストーカーされるのはもう慣れたのか？」
『ス・・・ストーカーって・・・密着取材です！！』
常にアリサやサクヤの背後を付きまとう記者の存在をからかうコウタ
『それに私だって望んでいることではありません！！』
「そうよコウタ・・・任務にまで密着してくるんだから・・・
アリサの苦労も解るでしょ？」
「う・・・たしかに・・・ごめんアリサ。」
自分の任務に記者が同行すると考えただけで、
その苦労を理解できてしまったコウタ
『気にしないでください・・・・・・でもいつまで続くのかしら・・・。』
密着取材の明確な期間は伝えられておらず
いつ終わるか解らない密着生活にうんざりした様子のアリサ達・・・

そんな談話するアリサ達を・・・離れた場所から撮影する記者の姿があった
「う～ん、目障りだなぁ・・・サクヤさん追い払いましょうか？」
「ダメよコウタ、記者さんも仕事なんだし・・・
今は撮影されても問題ないでしょ。」
「そうかもしれないすけど・・・あのおっさん割と遠慮無いですよ？」
『・・・悪い人では無いと思いますけど・・・。』
「まあ、もしプライベート空間まで盗撮しようとしてきたら・・・
その時は容赦しないわ。」
『もちろんですよ！』
「うお・・・こわっ・・・。」
容赦しないと言い切り拳を握りしめたサクヤとアリサの姿に怯えるコウタ・・・
と記者・・・

「ふうむ・・・やはり無理だ・・・バレたら殺されてしまう・・・。」
アリサ達の本当の姿を撮影したいと思う記者であったが
彼女達のプライベートルームを撮影するのは無謀であると理解させられた
本部とのコネがあるとはいえ、部屋を盗撮しバレてしまえば
追い出されるだけではなく、恐ろしい結末が待っているだろう・・・
「ううむ・・・どうすれば撮影できる・・・彼女の本当の姿・・・。」

極東支部　アナグラ　会議室
「さて・・・みんな集まったようだな。」
雨宮ツバキに呼び出された　サクヤ　レンカ　コウタ　アリサ　の4人と　記者
「今回の任務はアラガミの討伐・・・記者を同行させる。」
ツバキの言葉にゴッドイーター4人は不満の声を上げた
「マジっすかっ！　討伐任務は無理っすよ！？」
『同感です、私たちも任務中に余裕があるわけではありません。』
「そこまでする必要があるんでしょうか・・・？」
コウタ　アリサ　レンカの3人は危険を訴えていた
「・・・私も3人に同意します、
記者を同行させることで私たちの身にも危険が及びます。」
リーダーとなるサクヤも彼らに同意していた

４人の言葉を聞いていたツバキは辛そうな表情を浮かべていた
ツバキも記者を同行させるなど納得できていない・・・
しかし本部からの指令と支部長からの命令が重なれば・・・逆らうことはできない
ツバキにとっても悩みぬいた末の決断であった
「わかっている・・・だが、討伐対象のアラガミは最弱なものを選んでおいた。」
ツバキのこの任務の為に単独で行動している下級のアラガミを選んだ
本来ならば出動する必要な無いレベルの相手・・・
それに４人のゴッドイーターが出動する
という異常な任務でもあった
「待ってください・・・記者としては・・・・・・
もっと強力なアラガミとの戦闘を撮影したい！」
「・・・・・・却下する。」
「そ・・・そんなっ！？」

プレイベーと空間を撮影することができない以上・・・
記者は本来のアリサとサクヤの姿を撮影できるのは
任務中しかないと考えていた
強敵と命を掛けて戦い・・・そして打ち勝てば・・・
必ず本来の彼女達の姿を見ることができると考えていた
帰還した途端・・・または討伐したその場で・・・
乱れていたアリサの姿を見れるに違い無いと思い込んでいた
だが、弱いアラガミが相手となれば・・・
勝利の喜びも小さく盛り上がりにも欠ける

しかし、記者のその思惑はツバキの一言で一蹴されてしまった
完全にその場の空気に飲み込まれてしまった記者は
それ以上何も言えなくなっていた
「では・・・これより出動してもらう・・・どんな相手でも決して油断しないように！」
『はいっ！！』「はい！！」「はいっ！！」「はい！」
「・・・・・・・・・」

ゴッドイーター4人に守られ行動する記者・・・
本来ならばこれほど豪華なメンバーに
守られていること自体が最高の瞬間とも言える贅沢であったが・・・
記者にとっては無意味な任務でしかなかった・・・
「ほら、記者のおっさん　アラガミがいたぞっ！！」
「・・・・・・・・・。」
「おい・・・おっさんどうした！！？」
「えっ・・・ああ、本当ですね・・・・・・。」
コウタに促されアラガミを撮影する記者であったが・・・
足取りは重くカメラを構える姿にも全く覇気が無い
「なぁ・・・・・・ちょっと怯えすぎじゃないか、俺たちが付いてるじゃん！！？」
「えっ・・・いえ・・・決して怯えているわけでは・・・。」

「あの調子でよく・・・もっと強力なアラガミを・・・なんて言ってたわね・・・。」
「前回の任務で懲りたと思ったんだですけど・・・。」
『・・・本番に弱いタイプ・・・なんでしょうか。』
サクヤ　レンカ　アリサも記者の様子にどこか呆れているようだった

ナイトホロウ・・・ザイゴート・・・オウガテイルなどのアラガミを
次々に倒していくメンバー
コウタとレンカに守られながらその様子をカメラに収めていく記者・・・
華麗な動きで舞い　アラガミを倒すアリサとサクヤの姿・・・
露出の高い衣装から豊満な乳房が
大きく揺れ動く様子が鮮明に撮影することができた

「これは・・・想像以上に迫力のある映像が撮れましたね・・・・・・。」
撮影された映像を確認すると・・・激しい動きの中でチラチラとアリサやサクヤの
乳首まで鮮明に写っている場面も多々あった
「どれどれ・・・どんな感じか見せてよ！？」
「ああっ・・・コウタさんっ・・・ダメですよ、ちゃんと編集してからでないとっ！！」

「コウタ、記者さんの仕事の邪魔はしないで・・・任務に集中すること！」
「ちぇっ・・・わかりましたサクヤさん！」
記者の理想とする映像とは程遠いものであったが
ゴッドイーター達の戦闘姿を写した映像としては理想的なものが撮れていた
「ふう・・・まあ簡単に撮影させてはもらえませんよね・・・ですが・・・いつか必ずっ！」
それなりに満足した様子で笑みを浮かべる記者・・・

『記者さん・・・なんだか楽しそう・・・？』
「・・・さっきとはまるで違いますね・・・。」
「ええ・・・なんだか不気味だわ・・・。」
「恐怖で頭がおかしくなったんじゃないっすか？」
４人のゴッドイーター達は記者の様子の変化に戸惑いを隠せないのだった

しかし・・・突然響きわたるアラガミの雄叫びにメンバー達に緊張が走った
「こ・・・この雄叫び・・・。」
『任務外のアラガミが接近中のようですね・・・。』
高台に登り周囲を警戒するレンカとアリサ
「おっさん・・・絶対に離れるんじゃないぞっ！」
「わ・・・わかりました！！！」

記者と共に廃墟の中へと身を隠すコウタ・・・
「本部・・・応答してください・・・本部！！　こんなところで電波障害・・・？」
本来ならば電波障害など起きる地域ではないのだが
天候・・・または廃墟などガレキの影響で局所的な障害が起きる可能性はあった

「レンカ、無線連絡ができる場所まで移動して救援を要請して！！」
「了解です！」
「コウタは記者さんと一緒に行動、無茶はしないで！」
「了解っす！！」
「アリサは私と周辺の調査、アラガミの正体を調べるわよ。」
「了解しました！！」

アリサとサクヤは二人で周辺の調査へと向かった
あくまで雄叫びを上げたアラガミの正体を突き止めることであり
危険と判断した場合は速やかに極東支部へと連絡しなければならない・・・
記者を連れている以上、これ以上アラガミと交戦することはできない
『・・・この周辺から聞こえていたようですが・・・。』
「ええ、痕跡は残されているわね・・・。」
そこにはアラガミ同士が争い合った真新しい痕跡が残されていた
「一体はザイゴートのようね・・・もう一体は・・・。」
『・・・サクヤさんっ！！！』
痕跡を調べていたサクヤの背後・・・そこに動く大きな影に気づいたアリサ
「えっ・・・！？」

神機を構え振り返ると・・・そこにはアラガミ「コンゴウ」の姿があった
『コンゴウ・・・倒せない相手ではありませんけど・・・。』
「ええ、今はこいつを民間人から引き離すのが最優先ね。」
サクヤとアリサならば余裕を持って倒せる相手ではあった・・・
だが民間人である記者が近くにいる以上
ここで戦闘を繰り広げてしまえば巻き込む可能性がある・・・
万が一、記者の姿を見られれば・・・
コンゴウは記者に狙いを定め一瞬で食い殺してしまうであろう・・・
そんな危険を犯すことはできなかった

「ほら、こっちよっ！！」
『こっちにおいでっ！！』
二人は豊満な乳房を揺らしながらコンゴウを誘導し記者から遠ざけていった

「な・・・なんですか・・・銃声が聞こえますがっ・・・！？」
「ああ・・・サクヤさん達だろ・・・心配いらないって、あの二人なら・・・・・・・って？」
コウタが振り返ると・・・そこにいるはずの記者の姿が無かった
「嘘だろ・・・おっさんどこいったっ！！！？？」
元々影が薄い記者の予想外の素早い動きに気づかないコウタであった

『これだけ距離を取れば問題ないですね・・・。』
「ええ、でも急がないと・・・騒いだせいでザイゴートが何体が集まってきたわ。」
二人は神機を構え・・・一機にコンゴウへと斬りかかった・・・
素早い動きで攻撃を避けるコンゴウであったが・・・どこか様子がおかしい・・・
「なにか・・・変ですね・・・？」
『ええ、妙に興奮している様子だけど・・・これって・・・。』
興奮した様子のコンゴウはさらに雄叫びを上げまるで苦しんでいるようでもあった
そして・・・
アリサとサクヤの目の前で想像を超えた現象が起きた・・・
コンゴウの股間にオラクル細胞が集結し・・・
人間の肉棒と酷似した巨大な肉棒が形成されたのだった
『なっ・・・何が起きたのっ！！？？』
「まさか・・・変異したっ！？」
その姿には覚えがあった・・・
以前に遭遇し・・・長らく忘れていた新種のアラガミであった

※新種のアラガミ
人間の女性を交尾対象とし襲うことを目的としたアラガミ・・・
極東以外での目撃情報はなく、生態ほとんどが謎に包まれた存在であったが
数ヶ月前に極東支部において数人の女性ゴッドイーターが被害にあっている

「うっ、くううっ！！！？？」
『あああぁぁっぁあぁぁ、パパ・・・たすけてぇっ！！！！？？？』
「アリサッ！？？」

コンゴウに捕らえられたアリサ・・・
しかしパニック状態に陥っているアリサには数分前とは別人のように変わっていた
泣き喚き、暴れるその姿は
まさに体だけが立派に成長した子供といった印象であった

『パパ・・・ママッ・・・助けてぇっ！！？？』
目の前にいるサクヤではなく、両親を求めているアリサ
最初はそんなアリサの姿に動揺を隠せないサクヤであったが
アリサの過去の話については以前ツバキに聞かされたことがあった・・・
目の前で両親をアラガミに食い殺されたという辛すぎる記憶・・・
パニック状態となりその時の精神状態に戻っていることをサクヤは理解した
「アリサしっかりしてっ！！！私が解る！？？」
『あぁぁっ・・・怖いよっ・・・怖いっ・・・。』
もはやサクヤの声もアリサには届いていないようであった・・・
そして・・・
コンゴウの肉棒がゆっくりとアリサの秘部へと密着していった・・・
『いやぁぁっ・・・痛いっ・・・痛いよぉぉっ！！！？？』
必死に暴れるアリサだったが・・・
肉棒はゆっくりとアリサの膣内へと入り込んでいった

サクヤの目の前でコンゴウに抱えられ肉棒を挿入されたアリサ・・・
大粒の涙を流し泣きじゃくるアリサを助けようと
サクヤは立ち上がり神機を手に取ろうとしたが・・・
「きゃああぁぁぁっ！！！？？？」

神機を持たないまま、次第にザイゴートに追い込まれていくサクヤ・・・そして
壁際まで追い込まれたサクヤ・・・
その時・・・ザイゴートの体から突然何か粘液のような物体が噴出し
サクヤの体へと纏わりついてきたのだった
「な・・・なんなのっ・・・ベトベトして・・・動けないっ！！？？」
両手の自由を奪われてしまったサクヤ・・・動けば動くほどに粘液の力は強くなっていく

そして・・・抵抗できないサクヤの両足の間にザイゴートが入り込んでいく・・・
「いやぁっ・・・ダメよ、やめてぇぇぇっっ！！！！？？？」
ゆっくりと秘部へと密着し挿入されていく肉棒
膣壁を押し広げ侵入する肉棒に・・・サクヤは悲鳴を上げ続けた・・・

「あぐううっっ！！！？？　こ、こんなことでっ・・・負けないっ！！！！？？？」
全身に走る激しい快楽を必死で耐えるサクヤであったが
ザイゴートは全身を激しく揺らし
激しい勢いで肉棒でサクヤを突き上げた
「ひぐぅぅっっ！！？？？？？？？？」
人類の敵であるアラガミにいい様に弄ばれることなど
耐え難い程の屈辱であった・・・

「はぁ・・・はぁっ・・・たしかに悲鳴がこっちから・・・・・・聞こえたはずですが・・・。」
コウタの元を離れ
悲鳴が聞こえた方へと駆け出していた記者・・・
アラガミから身を隠しながら、悲鳴の主と思われるアリサ　サクヤの姿を探す
「一体何が起きているんでしょうか・・・・・・これは・・・。」
記者の目に飛び込んできたのは想像を超えた光景であった
コンゴウに抱えられ肉棒を突き立てられるアリサと
ザイゴートに押さえ込まれ激しい交尾に喘ぐサクヤの姿であった・・・
「・・・・・・・・・これが・・・ゴッドイーターの本当の姿なのですね・・・・・・。」
記者は夢中でカメラのシャッターを切り続けた
飛び散る汗・・・秘部から溢れる愛液・・・喜び喘ぐ表情・・・
その全てを記者はカメラに収めていった・・・

しかし記者の勝手な思い込みとは別に・・・アリサとサクヤは
この苦しみから逃れようと必死であった・・・
『あああぁぁぁ、お腹が・・・苦しいっ・・・・・・！！？？』
コンゴウの巨大な肉棒が挿入され
アリサの腹部は大きく膨らんでいた
アリサをまるで人形のように抱え激しく揺さぶるコンゴウ
『パパ・・・っ・・・苦しいよっぉ！！！？？』
アリサの精神状態は完全に幼い頃に戻っており
その言葉遣いも幼くなっていた
しかしコンゴウは肉棒での攻めを決して休めることなく
アリサの膣内を肉棒で激しく刺激し続けていた・・・

『ふあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁつつっ！！！？？？』
少女のように怯えるアリサだったが
その体は敏感な反応を見せていた
秘部から大量の愛液を溢れさせ、口からは　だらしなく唾液が流れ落ちている
そして・・・
限界を迎えたコンゴウがアリサの子宮へと大量の精液を射精したのだった・・・
『あがぁぁぁぁぁぁつっっ！！！！？？？？』

大量の射精を受けアリサの腹部はみるみる膨張していった

『あっ・・・あぐっ・・・・・・・うあぁぁぁぁっ！！！？？』

全身を痙攣させ、放心したまま動くことができないアリサだった

強烈な射精が続く中・・・胎内に収まりきらない精液が

「あぁぁっ・・・もうダメ・・・耐えられないっ！！！？？？」
自由を奪われザイゴートに弄ばれ続けていたサクヤも限界に達しようとしていた
必死に理性を保ち・・・全身で感じる快楽に耐え続けていたが
アラガミの肉棒はサクヤの体にとって理想的な形へとより進化を遂げ
サクヤの体をより快楽の高みへと導いているのだった
「あはぁぁっっ・・・あぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！！？？？？？」
ザイゴートの肉棒の前に・・・サクヤは屈してしまった・・・
その瞬間のサクヤの表情は快楽と後悔の入り混じった複雑なものになっていた

激しく腰を振りサクヤと交尾を続けるザイゴート
「あはぁっ・・・だめぇぇ・・・気持ち・・・いぃぃっ・・・・・・！！！！？？」
口元はうっすらと笑みを浮かべ快楽を楽しんでいるようにも見える
そして・・・
ザイゴートの肉棒から大量の精液が射精されると
サクヤは驚いたような表情を浮かべたまま硬直してしまった
『あっ・・・あがぁぁっ・・・・・・・！！！！？？？？』

ビクッ!?
う!?
あっ!
あぐっ!
ビクッ!?
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ

ザイゴートの射精の勢いと大量の精液にサクヤの体は硬直していた
その体は襲いかかる快楽に震えていたのだった
射精を終え肉棒が引き抜かれると・・・
大量の精液が秘部から溢れ出し流れ落ちていった
「あっ・・・・・・あぁぁつっ！？」
その横でアリサも横たわり、サクヤと同じように大量の精液を垂れ流している・・・
アラガミの精液が全身に染み付き異臭を放っていたが
二人は放心したまま動くことができなかった・・・
アラガミに襲われ弄ばれ・・・
神機使いとしてのプライドを引き裂かれた二人・・・
周囲に集まっているザイゴート達が
二人へと接近し・・・再び肉棒を挿入しようとも・・・
二人は抵抗することなく受け入れる・・・

そして・・・その様子を最後まで撮影し続けていた記者・・・
「・・・・・・素晴らしいですね・・・アラガミの更なる進化の瞬間と・・・
　アリサさんとサクヤさんの本当の姿を見ることができた・・・
感無量ですねぇ・・・！！」

Episode 03

記者が同行した任務中・・・新種のアラガミに襲われたアリサとサクヤ・・・
新種のアラガミの出現というだけでも大きなニュースだというのに
さらに人間の女だけを性的な目的で襲うとなれば
とんでもないスクープである
自ら目撃した光景を映像により詳細に記録した記者は
すぐにフェンリル本部へと報告を入れていた・・・
しかし・・・本部からの返答は記者の想像したものとはまるで違うものであった

「なんですって・・・本部はこのアラガミの存在を知っていたと・・・！？」
電話の相手の話によれば
フェンリル本部・・・そして極東支部において
新種のアラガミの存在は最重要機密とされており
これを記事にするのは認められない・・・とのことであった
ましてアイドル並の人気を誇る極東のゴッドイーター達が
アラガミに犯された事実など世界に伝えることなどできるはずもない・・・
記者が命懸けで手に入れてきたスクープは
何一つ認められなかったのだった・・・
「そんな・・・私がどれほど・・・。」

もしこの命令に背き・・・強引な手段でスクープにしたところで
記者自身が犯罪者として処罰・・・追放されてしまうことになりかねない
フェンリル本部は遠まわしに記者を脅迫したのも同然であった

しかし、記者が密着したゴッドイーター達の戦う姿はそれなりの評価を得たため
さらにゴッドイーター達の活躍を英雄的に記事にするようにと
今後も密着することは許されたのだった
だが・・・それは真実を記事にすることを望む記者の理想とは遠いものであった
ゴッドイーター達が英雄であることは記者も同意する・・・
しかし・・・彼らにもスキャンダルな一面があるということを証明したかったのだ・・・
「私は・・・諦めない・・・必ず彼女達の本来の姿を・・・公にしてみせるぞ・・・。」

極東支部　支部長室・・・

「記者に秘密が知られたか・・・困ったものだな・・・。」
新種のアラガミの存在・・・そしてアリサとサクヤの事を議論しているのは
支部長シックザールと
極東支部アラガミ技術開発局責任者・・・ペイラー・サカキ
「まさかこのタイミングで新種が再出現するとは・・・驚きだよ。」
「喜んでいるようにも聞こえるよサカキ博士・・・新種の研究は君の望みだったろ？」
「たしかに興味はある・・・
だからといってこれ以上の犠牲を望んでいるわけではないさ。」
「私もだ・・・新種が世界に与える影響は・・・想像を絶するものになるだろう・・・。」
「・・・・・・・・・なんとしても秘密にする必要があるね・・・。」
「・・・ああ・・・すぐに殲滅作戦の計画を立ててくれ・・・極秘のうちにな。」
「わかった・・・何とかしよう・・・。」

フェンリルとしても女性を襲うアラガミの出現は大問題であった
もしこの情報が漏れてしまえば、世界規模のパニックとなるであろう・・・
それだけは避けなければならない事態であった・・・

アラガミに犯された後・・・
先に意識を取り戻したサクヤによりアラガミ達から逃れることができたが
二人共に体力の消耗は激しく、しばらくの間病室から出ることができなかった

「先生、アリサの様子はどうですか？」
2日間の病室生活を経て、
回復したサクヤはアリサの見舞いに病室を訪れようとしていた
「もう大丈夫ですよ、今日にも退院許可が降りるはずです。」
「よかった、ありがとうございます！！」

『・・・あ、サクヤさん・・・？』
「アリサ・・・・・・大丈夫？」
『ええ、私・・・あまり覚えてなくて・・・何があったのか・・・。』
サクヤはあの日のアリサの様子が頭に浮かんでいた・・・
コンゴウに犯されている時のアリサはひどく動揺し別人のようであった
その影響で記憶が曖昧になっているのかもしれない・・・
そう考えたサクヤは無理に思い出させようとはせず
アリサに対して嘘をついてしまった・・・
「ごめんなさい、私の判断ミスでアラガミの襲撃を受けたの・・・
あなたはその時頭を・・・。」
『そうだったんですか・・・。』
一瞬複雑な表情を浮かべたアリサだったが
『気にしないでください・・・薬も飲みましたし、もう体調は万全ですから！！』
アリサは以前の明るさを取り戻していた
嘘をついたことには心が傷んだが・・・真実を告げることなどとてもできない
「よかった・・・ありがとうアリサ・・・。」

「ところでアリサ・・・薬って・・・大車先生の？」
『ええ、あれを飲むとすごく落ち着くんです・・・
先生はまだ戻ってないみたいですね。』
「ええ、エイジス島の方へ出たきり戻ってないみたいね。」

「薬・・・ですか・・・。」
『きゃあっ！？』
「きゃああっ！！？　記者さん・・・あなた何してるの！？」
突然声をかけられ悲鳴を上げるアリサとサクヤ・・・
「私はずっとここにいたんですが・・・影が薄くてすいません・・・。」
「いえ・・・私たちこそ叫んでしまって・・・。」
『それで・・・何か用でしょうか？』
「ええ、実はサクヤさんにお話が・・・少しお時間を頂けませんか？」
「私に・・・？　ええ、構いませんけど。」
「でわ・・・こちらへ・・・。」
『では、サクヤさんまた後で！』
「ええ。」

記者に案内され彼の私室へと通されたサクヤ・・・
「・・・わざわざ部屋で・・・余程重要なお話なんでしょうね？」
「もちろんです！　さっそくですが・・・これを見て頂けますか？」
「・・・？」

記者はリモコンを手に取ると・・・テレビのスイッチを入れた・・・
「・・・こ・・・これは！？？」
テレビに映し出されたのは・・・
アラガミに襲われ肉棒を挿入されたアリサとサクヤの姿・・・
（あはぁぁっ・・・あああぁぁぁっ！！！！！！？？？）
鮮明に撮影されたその映像にサクヤは言葉を失っていた・・・
「もう十分ですね・・・お分かり頂けました？」
「・・・・・・何が目的なの・・・？」
サクヤは殺意に満ちた目で記者を睨みつけていた
「ひいっ・・・私に何かあれば・・・この映像が公になってしまいますよ！？」
「・・・・・・私に何を望んでいるの・・・？」
「・・・そ・・・そうですね・・・。」

記者はサクヤに近づくと・・・手を伸ばし乳房に触れようとしてきた・・・
「・・・！？？？」
思わずその手を振り払おうとしたサクヤだったが
記者の思惑を理解しその手を止めた・・・
「うっ・・・くうっ・・・！？」
記者に指がサクヤの豊満な乳房に食い込む・・・
「はぁ・・・はぁ・・・これがサクヤさんの・・・！？」
記者は激しく興奮した様子でサクヤの胸を揉み続けた・・・
そして・・・
「つ・・・次はこちらを・・・・・・！？」
記者がサクヤの下着に手をかけようとした・・・
「待って・・・！？」
「はいっ・・・！？？？」
「・・・約束して・・・私はどんな事をされてもいいから、
アリサには手を出さないで。」
「・・・・・・わかりました・・・アリサさんには何も話しません・・・。」

自分とアリサのアラガミに犯される様子を撮影された映像・・・
記者がこんな行為をする人間だと見抜けなかったことに悔しさを滲ませるサクヤ
そして、精神的に不安定な状況にあるアリサを巻き込むわけにはいかない
密着のために極東を訪れている記者は取材が終われば立ち去る・・・
それまで僅かな期間・・・耐えればいい・・・サクヤはそう考えていた

「ああ、素晴らしい・・・憧れのサクヤさんと・・・。」
サクヤの下着をゆっくりと下ろし露になった秘部をじっくりと観察する記者・・・
「んっ・・・くっ・・・！？」
自分の父親ほどの年齢の男に体を弄ばれるのは耐え難い苦痛であった
しかし、弱みを握られアリサのことを想うサクヤには抵抗することができない
「あっ・・・あぁぁっ！！！？？？」
「さあ、サクヤさん・・・こっちへお願いします・・・。」
「・・・・・・・・・わかったわ・・・。」
記者に手を引かれベッドへと向かうサクヤ・・・
そして・・・先にベッドの上に仰向けになった記者の上にまたがり
記者の肉棒を自分の秘部へと押し当てたのだった
「うっ・・・んっ・・！？」
「ああ、サクヤさん・・・とても暖かいですよっ・・・！！？」

記者の肉棒が根元まで膣内へと収まった

「あうっ・・・なんでこんな・・・っ・・・！」

「ほらサクヤさん・・・腰を動かしてっ・・・！！」

「・・・はいっ・・・！」

サクヤは自ら腰を振り記者の肉棒を激しく刺激した

記者は満面の笑みを浮かべサクヤの腰使いを満喫しているようだった

だが・・・

「ああっ・・・サクヤさんもうダメです・・・こんなに激しくされたら私・・・。」
「えっ・・・もうっ・・・・・・待って・・・我慢してっ！！」
サクヤが腰を振り始めてから短時間で・・・記者は限界を迎えてしまっていた
咄嗟の記者の言葉に対応しきれないサクヤ・・・
そして・・・
「おおおうっ・・・出てます・・・サクヤさんの中にっ・・！？？」
「いやぁぁっ・・・だめぇぇぇっっっ！！！？？？」
サクヤの膣内で脈打ち大量に射精されていく精液・・・
サクヤの瞳からは涙が滝のように溢れていた・・・

「はぁ・・・はぁ・・・素晴らしいですよサクヤさん・・・。」
「・・・うっ・・・うぅっ・・・・・・。」
悔しそうに涙を浮かべるサクヤ・・・
だが・・・こんな男に負ける訳にはいかなかった・・・
サクヤは涙を拭くと毅然とした態度で男を睨みつけた
「約束を忘れないで・・・もし破ったら決してあなたを許さないわ・・・。」
「・・・・・・うっ・・・わかっていますよ・・・私もこれ以上は望んでいませんので・・・。」
記者はサクヤと肉体関係を続けるだけで満足であると言い切った・・・
サクヤにとって辛い日々になるであろうが・・・
責任感の強い彼女は、
自分だけが犠牲になれば全てが丸く収まると覚悟を決めていた

「でわ、サクヤさん・・・また・・・。」
「・・・失礼します・・・・・・。」
記者の部屋から立ち去っていったサクヤ・・・

「ふう・・・素晴らしい時間でしたね・・・良い映像も撮れましたし・・・。」
記者の部屋には無数の隠しカメラが設置されており
サクヤと記者の交わる光景が様々な角度から撮影されていた・・・
世紀の大スクープ・・・となったかもしれない
新種のアラガミと美女ゴッドイーターの交尾記事
これを台無しにされたことで記者の心は歪んでしまっていた・・・
記事を握りつぶしたのはフェンリル本部であり
ゴッドイーターであるサクヤやアリサは被害者でしかなかったのだが
フェンリルに逆らうことのできない記者は・・・
弱みを握り逆らうことのできないサクヤとアリサに怒りと不満をぶつけ
性欲で満たそうとしていたのだった・・・
「さて・・・お次は・・・。」

「こんにちわ・・・アリサさん。」
『あれ・・・記者さん・・・何か御用でしょうか？』
アリサの部屋を訪れた記者・・・
サクヤとの約束など記者は守る気など最初から無かったのだった・・・

『それで・・・お話とは・・・？』
「実は・・・これなんですが・・・。」
『こ・・・これは・・・！！？』
記者がテーブルに並べた写真・・・
そこにはアラガミに犯されているアリサ自身の姿があった
『こ・・・こんなことありえないっ！？　なんのためにこんなものをっ！？』
当時の記憶が曖昧になっていたアリサは
これが捏造された写真だと思い込んでいるようだった
「わ・・・私が偽造した写真ではありませんよっ・・・
これは・・・実際に起きた事です！」
『実際に・・・私が・・・！？？』
「ええ・・・この映像を見て下さい・・・。」
記者が差し出した端末には・・・
喘ぐアリサの姿が音声までしっかりと録画されていた
『サ・・・サクヤさんまで・・・！？』
「ええ・・・お二人とも大変な目に遭いましたよねぇ・・・
これが漏れたら大変なことです。」
遠まわしにアリサを脅迫しようとする記者であったが・・・

『私・・・私がっ・・・・・・！？？』
アリサは想像以上にショックを受けている様子で
記者の言葉が聞こえていないようだった
「あの・・・アリサさん・・・聞いていますか？」
『私・・・なんでアラガミと・・・？　記者さんどうしてっ・・・私は・・・！？』
「お・・・落ち着いてください・・っ！？」
足元がふらついていたアリサの体を支える記者・・・
その際に遠慮なくアリサの乳房を揉んでしまった記者であったが・・・
アリサは特に声を上げることもなく・・・特別な反応を示さなかった
『私・・・私・・・。』
「・・・・・・・・・・・・。」
記者はアリサが気づかないのをいいことに・・・
さらにスカートの中へと手を伸ばし
尻を撫で回していた・・・
そして・・・秘部にまで手を伸ばした時・・・
『いやっ・・・何を・・・するんですかっ！？』
ようやく記者の行為に気づいたアリサ・・・
「いえ・・・あの・・・私の話を聞いてもらえます・・・？」
『・・・・・・・・・・。』

『・・・じゃあ・・・記者さんの言う事を聞いていれば・・・私もサクヤさんも・・・？』
「ええ・・・・・・何も心配はいりません、今までと同じ生活を送れます。」
記者はパニック状態のアリサに対し・・・
自分と肉体関係を持つことで全てを秘密にすることができ
今までと変わらない生活を送ることができると教えた・・・
全く筋の通らない話であったが・・・今のアリサは気づかない・・・
『先生は・・・大車先生もそう言っているんですか？』
「えっ・・・ええ、先生の意見も同じですよっ！」
『・・・わかりました・・・。』

アリサにとって主治医である大車の言葉は「絶対的」なものであった・・・
それは大車がとある目的の為にアリサを洗脳状態に導いた為であったが
記者がそのことを知るはずもない・・・
あくまで言葉の流れから答えただけであったが
その言葉はアリサを服従させるのに十分であった・・・
『・・・これでいいですか・・・？』
「ほおお・・・これはまた見事な・・・。」
記者の前で乳房を露出したアリサ・・・
『あっ・・・！？』
記者は遠慮することなくアリサの乳房を鷲掴みにしその感触を楽しんでいた
「ふうむ・・・サクヤさんとはまた微妙に違う感触ですね・・・興味深い・・・。」
『・・・えっ・・・・・・？』
「いえ、なんでもありません・・・！！」

記者はアリサをベッドへと押し倒し・・・唇を合わせ激しく舌を絡ませていった・・・
『んんっ・・・んぁっ・・・！！？』
アリサは無表情のまま記者の舌を受け入れていた・・・
もっと抵抗されるかと想像していた記者にとっては奇妙なものであった
大車により洗脳されやすい体質へと教育されてきたアリサは
追い込まれ・・・記者との会話の中で自然と自ら洗脳状態へと入り込んでしまった
自分自身を守るための防衛本能からであった
「さあ・・・それじゃあ挿れさせてもらいますよ・・・？」
『は・・・はいっ・・・お願いします・・・。』
記者の肉棒がアリサの膣内へとゆっくりと挿入されていった・・・
『はぁっ・・・あぁぁぁぁっ！！！』

「ほお、アリサさんもっと腰を振って・・・！」

『はっ・・・はいっ・・・・・・こうですかっ！！』

肌がぶつかり合う音と共にベッドが軋む音が部屋に響く・・・

アリサは時折苦しそうな表情を浮かべるものの

抵抗することは全くしなかった

激しく背後から肉棒で突かれ続けるアリサの瞳には

「アリサさんっ・・・中に出してもいいですかっ？」
『はいっ・・・中に出してっ・・・くださいっっ！！』
敵意をむき出しにしていたサクヤとは違い・・・
従順に応えてくれるアリサとのセックス・・・
記者はすぐに限界を迎え、アリサの膣内で射精してしまった
『あっ・・・はぁぁっ・・・熱いですっ・・・私の体っ・・・！！？』

「はぁ・・・はぁ・・・素晴らしい時間でしたよアリサさん・・・。」
『は・・・はい・・・ありがとうございます・・・・・・。』
記者の肉棒を咥え残った精液を吸い取りながら・・・アリサは笑顔で答えた

サクヤとアリサ・・・弱みを握られた二人の運命は・・・これから更に過酷なものとなる

Episode 04

極東支部　支部長室・・・

「なんだねツバキ君・・・こう見えても私は忙しい身なのだが・・・。」
「密着取材の件・・・考え直しては頂けないでしょうか？」
「またその話かね・・・。」
ゴッドイーター達に対する密着取材を即時中止するように求る雨宮ツバキだが、支部長シックザールの反応は冷たいものであった
「何かまた問題が起こったというのかね？」
「はい、密着中のゴッドイーター・・・特にサクヤとアリサについて・・・。」
ツバキは最近になり特に二人の態度に変化が出たことを強く感じていた
サクヤは時折イラついた様子を見せるようになり
アリサは極東支部に来た当初のように感情をあまり表に出さなくなっていた
二人共記者から脅迫され肉体関係を続けていることが原因であり
サクヤはストレスから・・・アリサは洗脳からくる反動であった

「・・・すでに密着され一ヶ月近くになります・・・。」
「彼女達の精神状態も追い込まれてしまっているようだな・・・いいだろう。」
「では・・・！？」
シックザールはこれ以上の密着が任務に更なる悪影響を与えると判断しこの件について本部と相談することをツバキに約束したのだった

そして・・・
「なんと・・・あと一週間で密着は終わりですと・・・！？」
本部からの連絡を受け愕然とした様子の記者・・・
当初のスキャンダルを台無しにされた後
ようやくサクヤを脅迫・・・アリサを洗脳でき
美女達との最高の時間とスキャンダルを手に入れたところであった
だが、記者としてはここで下がる訳にはいかなかった
フェンリルも認めざるを得ない・・・そんな大ニュースを求めていたのだった
「ななな・・・なんとしても・・・スキャンダルを物にしなければ・・・。」

「・・・ダメだ・・・許可できない・・・。」
「えええ、なぜですか・・・ツバキさん・・・！？」
残された時間が少ないことに焦る記者は
すぐにでもアリサとサクヤの任務に同行することを求めたのだった
しかし・・・
記者とサクヤ達の間に何か問題が起きた事はツバキも察知していた
あくまでもツバキの女の感であったが
疑惑を抱いてしまった以上・・・記者を同行させるのには反対の立場を取った
「ですが・・・私は本部から直接・・・っ・・・！？」
「・・・・・・・・・・・・・。」
「ひいいっ・・・！？」
ツバキの怒りに満ちた目つきに怯える記者・・・
ゴッドイーターの教官としてはこの上ないほどに頼もしいものであったが
今の記者にとってはやっかいな存在でしか無い・・・

「で・・・では・・・他の方の任務に同行させて頂けないでしょうか？」
「・・・他の・・・？」
「ええ・・・、密着時間も残り少ないですし・・・
どの部隊の方でも構いませんので・・・。」
「・・・・・・・・・。」

翌日・・・記者は任務への同行が許可された・・・
密着するのは・・・「台場カノン」「ジーナ・ディキンソン」
訓練生「エリナ」の3人であった
エリナはまだゴッドイーターとして認められていなかったが、
オラクル細胞に適合し、
近いうちにゴッドイーターとして認められることが予定されていた
あくまで訓練という形でカノンとジーナの任務へと同行する形となっていた
彼女達の任務は・・・極東支部周囲の見回りであり
任務としては最も安全性が高く・・・
アラガミとの遭遇率も極端に低いものであった
「この任務で不満はないな？」
「もちろんです・・・わざわざありがとうございます！」

しかし・・・
女性だけのチームへの同行・・・これは記者の計算通りの計画であった
あらかじめ各部隊の予定や状況を入念に調べ上げ
女性だけのチームに同行できるタイミングで
密着取材を申し入れたのであった・・・
これは女性だけのチームに同行すれば・・・再び新種が出現し
彼女達の襲われる姿を撮影できるのでは・・・
という奇跡を期待してのことであった

『記者さんどうもはじめましてっ！』
「どうぞよろしく・・・。」
「よろしくお願いします・・・！」
元気が良いカノンと愛想の無いジーナ・・・
そして緊張を隠せないエリナ・・・
「こちらこそ・・・。」
サクヤやアリサほどでは無いが人気の高いカノンとジーナ・・・
そして若く将来性の高いエリナの3人・・・
スキャンダルのネタとしては十分すぎる組み合わせであった・・・

極東支部を出発し徒歩で周辺の見回りを開始した4人・・・
『記者さん、密着取材ってどんなことをするんですか？』
「えっ・・・そうですね、皆さんの日常の任務は意外と知られていないので・・・。」
「私たちに付き纏ってそれをカメラに収めるって訳ね・・・？」
『ええ、じゃあ私たちのカッコ悪い姿も紹介されちゃうんですか！？』
「い・・・いえ、ちゃんとフェンリルが監修しますので大丈夫ですよ。」

「・・・まずい・・・変な真似できないわね・・・。」
「エリナ・・・緊張しすぎよ・・・。」

美女達に密着できたことは幸運であったが・・・
極東支部周辺の見回りということもあり
小さなアラガミの姿すらほとんどなく記者が望んでいた新種の出現は全く無かった
「ううむ・・・・・・全くアラガミの姿が見当たりませんね・・・。」
『ですよねぇ、でもアラガミが居ないって良い事なんですよ！』
「も・・・もちろん解っています！！」
アラガミと遭遇しない状況に不満を漏らす記者・・・
「カノンの言う通りだけど・・・密着する側としてはつまらないわよねぇ・・・・・・。」
「ジーナさんは暴れたいだけじゃないんですか・・・？」
「うるさいわよエリナ・・・。」

しかし・・・その平穏はすぐに打ち破られることになる・・・
『あれは・・・！？』
カノンが見つけたのは・・・アラガミ「オウガテイル」の姿だった
しかし、その場所まで距離があり追いかければ任務外の場所に入ってしまう
「無理に追う必要はないけど・・・。」
『このままじゃ記者さんが気の毒じゃないですか？』
「けど、訓練生のエリナも一緒だし・・・無茶はできないわ。」
「私なら平気ですよ・・・オウガテイルぐらいならジーナさんがすぐ倒しちゃうでしょ？」

「す・・・すみません、私の取材の為に・・・。」
３人は記者の為にオウガテイルのあとを追っていた・・・
そして極東支部周辺ということもありジーナとカノンは完全に油断してしまっていた・・・
それが大きな判断ミスを招くこととなるのだった・・・

『ジーナさん待ってくださいよ～っ！！』
「うふふ・・・早く撃ちたいわ・・・っ。」
「あぁ・・・ジーナさんの悪い癖が・・・。」
クールな外見同様に冷静な性格に見えるジーナだったが
アラガミを撃ち抜くことに至上の喜びを感じており
特に獲物を追い詰める状況になると我を忘れてしまう傾向があった・・・
オウガテイルを追うジーナもまさにその状況であり
カノン達を置き去りにし走り去ってしまった・・・
『ジーナ・・・私たちを置いていったわね・・・っ！？』
「ちょっ・・・カノンさん落ち着いてっ！？」

偏食因子との適合率が高く
戦闘が始まるとひどい興奮状態に陥ることがあるカノン・・・
記者を同行させていることを忘れ暴走したジーナに対して怒りを露にしていた
『あっ・・・ごめんなさい・・・エリナさん・・・ちょっと動揺しちゃいましたっ！』
「うう・・・私訓練生なのに・・・・・・。」
３人の中で最もマトモなエリナであったが
仲間達が次々に暴走を始める中で不安の色を隠せない
「ま・・・待ってくださぁ～い・・・・・・！」
『あっ・・・。』
「いけない忘れてた・・・っ・・・。」

「お・・・置いていかれたら私はどうすればいいんですかぁっ！」
『ごめんなさぁいっ！！』
「全部ジーナさんのせいですからっ！」

『これ以上の任務続行は危険ですね・・・帰還しましょうっ！』
「うん・・・それがいいと思います・・・。」
「えっ・・・まだ何もカメラに収めてませんが・・・・・・。」
ジーナが暴走してしまった以上・・・
記者を連れての任務は危険と判断したカノン
エリナにフェンリルまで記者を送り届けるように頼んだ
「カノンさんは？」
『私はジーナさんを探してきますっ、きっと迷子になってると思いますからっ！』
「迷子ね・・・でわ、先に帰ってます・・・。」
「はぁ・・・今日１日無駄になってしまった・・・。」

極東支部への帰り道・・・ひどく落ち込んだ様子の記者の足取りは重い
「・・・なんでそんなに落ち込んでるんですか・・・？」
「あ、いえ・・・まだこれといった取材ができていない上に・・・。」
フェンリル本部を納得させられる取材ができていないうえ
密着取材があと一週間しか許可されていないことを告げる記者
「そっか・・・おじさんも大変なんだね・・・。」
「いえ・・・神機使いの方ほどじゃありませんよ。」
ひどく落ち込んでいる記者だったが・・・
そこに予想外の来客が押し寄せてきたのだった
突然二人の行く手を遮るようにガレキが崩れ落ちてきた
「きゃあっ！？」
「ななななんですかっ！！？？」

崩れ落ちたガレキを掻き分け・・・姿を現したのは・・・
巨大なワニのようなアラガミ 「ウコンバサラ」 であった・・・
「そんな・・・あと少しなのにっ！？」
「ひいいぃっ！！！？？」
二人へと一気に迫るウコンバサラ・・・
しかし・・・怯える記者は恐怖で動くことができなかった・・・
「た・・・たた・・・たすけっ・・・・・・！！」
目の前まで迫るアラガミの牙・・・記者は死を覚悟した・・・だが
「きゃあああぁぁっ！！！！？？」
「へっ？」

ウコンバサラは記者の横を素通りし・・・エリナのあとを追い掛け回していた
「これは一体・・・はっ・・・そうかっ！！！？」
記者はウコンバサラの体にある特殊なものに気づいたのだった
それは・・・ウコンバサラの股間から伸びている巨大な肉棒・・・
エリナを追いかけているアラガミ・・・それは新種のアラガミであった
「これは素晴しい！？　奇跡です！！　奇跡が起きましたよっ！！！」
すぐにカメラを構える記者・・・
新種のアラガミに追い掛け回される美少女訓練生・・・
「う～ん、完璧ですね・・・興奮してきましたよっ！！」
しかし・・・思いのほかエリナの足は早く
一向にアラガミに追いつかれる気配が無かった・・・
「・・・・・・このままではエリナさんが逃げ切ってしまうかもしれない・・・仕方ないっ！」

「うあああああっ・・・いつまで追ってくるのよっ！！？？」
懸命に逃げるエリナの耳に突然おかしな声が聞こえてきた
「ひょあああぁぁぁ]・・・・・・！！」
「！！！？？？」
エリナが声の方を振り返ると・・・そこには誰もいなかった・・・
しかし・・・
「ひいえええええっ・・・・！！」
姿は見えないが、記者の奇妙な声がどこからか聞こえてくるのだった
「な・・・なんなの・・・記者のおじさんどこよっ！？」
しかし、記者の狙い通り・・・
声に気を取られたエリナは一気にウコンバサラに接近され
「きゃあああぁぁっ！！！？？？」
ウコンバサラに押し倒されてしまったエリナ・・・
「な・・・何をする気っ・・・嘘・・・これってっ！！？？」

エリナの尻に押し当てられる固い物体・・・
それがアラガミの肉棒であることはエリナにも理解できた・・・
「いやぁぁぁぁぁっっ！！！？？？」
恐怖で泣き叫ぶエリナ・・・しかし
肉棒は下着をずらし、強引にエリナの秘部へと密着・・・
膣内へと挿入しようとしていたのだった
「まってっ・・・私そこ・・・はじめてなの・・・だから・・・やめてっ！！！！」
まだ異性との交際経験すら無いエリナ・・・
恐怖に怯え必死に逃れようとするが・・・
ウコンバサラは決してエリナを逃げそうとはしなかった・・・
「うっあぁっ・・・痛っ・・・いやぁ、入ってきてるっ！！！？？？？」
エリナの膣内に・・・ウコンバサラの肉棒がゆっくりと挿入されていった・・・

「あっ・・・あぁぁ・・・あがあぁぁっ！！！！」
メリメリと音を立てて挿入されていく肉棒・・・
苦痛に満ちた表情を浮かべるエリナ・・・
全身に感じていたのは今まで感じたことのない感覚・・・
苦しく・・・痛み・・・耐え難い程の敗北感に襲われていた・・・
兄のようなゴッドイーターを目指し訓練を受けてきたが・・・その全てが
実戦ではまったく役に立たなかった・・・
「あっ・・・だめっ・・・苦しっ・・・・・・！？」
大粒の涙をながしながら・・・必死に耐えるエリナ・・・だが
無情にもウコンバサラの肉棒か大量の精液が放たれたのだった・・・
「ひぁっ！！！！！？？？？？？？？？」

エリナは全身を反らし驚いた表情を浮かべていた・・・
「あっ・・・あぁぁっ！！！？？？？？？？？？」
全身が熱くなり胎内では肉棒が激しく脈打っていた・・・
精液が溢れ腹部は次第に膨れ上がっていく・・・
エリナは何が起きているのかまったく理解できていなかった・・・
突然アラガミに犯され激しい苦痛に襲われている現状・・・
全てが現実とは思えない出来事の連続であった・・・
「あぐうっ・・・ひあああっ！！！？！？？？」
肉棒が引き抜かれると大量の精液が逆流し
エリナの秘部から噴水のように溢れ出した
エリナは全身を痙攣させ続け・・・白目を向き・・・意識を失ってしまった・・・
「あっ・・・あぁっ・・・・・・あっ・・・・・・。」

そして
その光景をガレキの影からカメラと共に見つめていた記者・・・
「すごい・・・こんな・・・想像以上の映像が撮れました・・・！？」
エリナの映像だけでも十分に満足できるものであったが・・・
「そういえば他の二人はどこへ・・・？」
記者としての感が働いたのか・・・カメラを抱え記者は走り出していった・・・
後には精液に塗れ放心するエリナだけが残されていた・・・

「よせっ・・・やめろぉっ！！！」
「やはり・・・私の感は冴え渡っていますよっ！！」
記者が発見したのは追っていたはずのオウガテイルに
襲われているジーナの姿であった
ジーナのパンツは既にズタズタに引き裂かれており尻が丸出しになっていた
大きく開いた両足の間から秘部までハッキリと露になっており
記者のカメラにはその全てが収められていた

「くそっ・・・このままじゃっ！？」
オウガテイルの肉棒は今にもジーナの膣内へと入り込もうとしていた
ジーナは片足で必死にアラガミの体を押し上げ・・・
なんとか耐えている状況だった
「うああっぁ・・・ダメだ・・・もう限界っ・・・！？？」
アラガミを支える足も既に限界を迎えていた・・・
そして・・・
「あぁぁぁぁぁぁっ、ダメっ・・・入ってる・・・中にっ・・・いやぁぁぁっ！！！？？」
次第に力が抜け始めると・・・
アラガミの肉棒はゆっくりとジーナの膣内へと挿入されていく
全身に激しい刺激が走り・・・思わず力が抜けそうになるジーナだったが・・・
僅かに力を緩めるだけで・・・肉棒はぐっと膣内へと入り込んでくる・・・
「うぐううっっ！！！？？？」

肉棒を挿入されながらもアラガミとの一進一退の激闘を繰り広げるジーナ・・・
だが・・・
アラガミの肉棒を押し返し・・・また入り込むことを繰り返すうちに
ジーナの秘部からは大量の愛液が溢れ出していた・・・
「ああぁぁっ・・・あぐぅぁぁぁあっっ！！！！？？」
ジーナの体には激しい快楽が襲いかかっていた・・・
口から唾液を垂れ流し・・・瞳からは涙が溢れていた・・・
必死に抵抗しながらも襲う快楽の前に負けそうになっていた・・・
そしてついに・・・
快楽に負けたジーナの体から力が抜けていった・・・
「うあああああぁぁぁぁっぁつっっ！！！？？？？」

ジーナの膣内へと一気に入り込んでいった肉棒・・・
悲鳴を上げ悶えるジーナ・・・
その姿は戦闘狂とさえ言われたゴッドイーターの姿とはかけ離れたものであった

激しい腰使いでジーナを攻めるオウガテイル・・・
そのあまりの激しさにジーナは完全に我を忘れてしまっていた・・・
その口元はどこか嬉しそうに笑みを浮かべているようにさえ見えた・・・
「あはははぁぁぁっ・・・いいっ・・・すごいぅぃぃぃっ！！！！？？？？」
そして・・・
オウガテイルの肉棒が大きく脈動し大量の精液が射精されると
ジーナは快楽の声をあげたのだった

エリナ同様に強烈な射精の前に意識を失ったジーナ・・・
「あがっ・・・あ・・・あぁっ・・・。」
溢れたオウガテイルの精液の中で倒れこむジーナ・・・
秘部からは大量の精液が逆流し続けていた・・・

「・・・・・・・・・・・・・。」
想像を絶する光景の連続に記者は言葉を失っていた
同時に一大スクープとも言える映像を収めることに成功し
心の奥から喜びが溢れていたのだった・・・

その頃・・・
『いやぁぁぁ、離してぇぇぇっ！！！？？』
カノンが遭遇していたアラガミ・・・それは「セクメト」
シュウ神族に属する禁忌種・・・
非常に珍しいアラガミでありながら、その特殊な外観から知名度は高い
セクメトに拘束されてしまったカノンは両足を開き下着が丸出しとなっていた
『いやあぁぁ、恥ずかしいよぉっ！！？？』
セクメトから必死に逃れようとしていたカノンだったが
両手足を拘束され抜け出すことはできなかった

『な・・・なにこれ・・・一体どうなってるのっ！？』
拘束されたカノンの目の前で・・・ムクムクと肥大化していく巨大な物体・・・
それが女性型アラガミであるセクメトの肉棒であるなど
カノンが理解できるはずもなかった・・・
セクメトの肉棒はカノンの秘部を下着の上から執拗に刺激した・・・
『ひあああぁぁっ！！？？？』
全身を恐怖で震わせるカノン・・・
だが・・・
カノンの下着にはうっすらと染みが浮かび、秘部を刺激されたことにより
体は敏感な反応を見せているようであった
『ジーナさん・・・助けてっ・・・みんなどこにいるのっ！？？？』
必死に助けを求めて叫ぶカノンだが・・・その声に応えるものはいない
しかし・・・
ガレキの隙間からその様子をしっかりと撮影している記者は存在していた・・・
希少なアラガミである「セクメト」と遭遇できたばかりではなく
そのセクメトとカノンとの交尾を撮影できるという状況に興奮している様子だった・・・

『あはっ・・・だめぇ・・・なんで・・・入ってきてるのっ！？』
膣内へと挿入された肉棒はゆっくりと奥深くへと入り込んでいった・・・
『あはぁぁぁぁぁぁ・・・あっ・・・あああぁっ・・・あぁぁぁっっ！！！？？？』

激しい刺激に襲われ悲鳴を上げるカノン・・・だが

突然・・・悲鳴がピタリと止まると・・・

カノンの表情は一変した・・・

『あはぁぁっ・・・これ・・・すごいわぁ・・・・・・！？』

「えっ・・・・・・？？？」
撮影を続けていた記者も思わず声が出てしまっていた

『あはぁぁっ・・・すごいわっ・・・これすごく気持ちいいのぉっ・・・！！！！？』
表情だけではなく人格すらも変貌してしまったカノン
セクメトの激しい腰使いを笑顔で受け入れ
自ら腰を振っている様子もあった・・・
カノンのこの二重人格のような体質は
偏食因子との適合率が高いことが原因と考えられているが
未だによくわかっていない
ジーナ　エリナとは対照的な反応を見せているカノンの様子は
ある意味で衝撃的ではあるが
撮影している記者自身も何が起きているのかよく理解できていないのだった・・・
「これは・・・もしかしたら貴重な研究資料になるかもしれませんね・・・。」

『あははぁぁっ・・・ぎもぢいいっ！！！！！？？？』
大量の潮を吹きながら悲鳴を上げるカノン・・・
そして・・・
セクメトはさらに動きを強め鼻息を荒くし始めた
『ひあああぁぁぁっぁぁぁっっっ！！！？？？？？』
カノンの体にはさらに激しい快楽が押し寄せ
肉棒が膣内で脈打つと共に大量の射精が開始された
『ああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？？？』

射精を受けカノンの腹部は大きく妊婦のように膨らんでいった・・・

『あぁぁっ・・・ぁぁっ・・・あっ・・・・・・。』

怒涛の快楽の前にカノンは完全に魅了されていた・・・

セクメトの肉棒が引き抜かれると・・・
カノンの腹部に収まっていた大量の精液が一気に滝のように流れ出した
『ひいいいぃぃっっ！！？？？？？』
射精される時とは違う排出する快楽に襲われるカノン・・・
全身を痙攣させぐったりとした様子であった

セクメトはさらにカノンを辱めようと再び肉棒を挿入した・・・
『うっ・・・ふああっ・・・！？』
しかし・・・
突然、大きな閃光と共に現れたのは・・・
ゴッドイーター　サクヤ　そして　アリサであった・・・
「カノン・・・しっかりしなさいっ！！」
突然の邪魔者の登場にセクメトは激怒した様子であったが
サクヤとアリサのコンビネーションに翻弄され
サクヤの一撃がセクメトの腕に命中した・・・
不利と感じたのか・・・セクメトは体制を立て直す為に後退していった・・・

「・・・・・・逃げたようね・・・カノンっ大丈夫っ！？」
「カノンさんしっかり・・・っ・・・！？」
カノンへと駆け寄るサクヤとアリサ・・・
『あは・・・サクヤさん・・・？』
セクメトの精液に塗れていたが・・・カノンは無事のようであった・・・
サクヤとアリサは更に意識を失ったジーナとエリナを回収・・・
そして・・・

「サクヤさんアリサさん・・・救出に感謝します・・・。」
サクヤ達の前にようやく姿を見せた記者・・・
「あなた・・・よくも・・・・・・。」
怒りを決して隠そうとしないサクヤは・・・ゆっくりと記者の元へと歩き出した
「ひっ・・・ひえええっ！！！？？」
そしてサクヤは怯える記者の手からカメラを奪い取ると・・・
勢い良く地面へと叩きつけ粉々に砕いたのだった・・・
「ああぁぁ、なんてことをっ！！！？？？」
「もう限界よ・・・これ以上あなたの好きにさせないわっ！」
「・・・・・・・・・。」

その固い決意に満ちた表情を前に・・・記者は何も言えなかった・・・
同時に今まで感じたことのないほどの恐怖を感じていた・・・
もはやサクヤは自分の言いなりにはならない・・・
次におかしな行動を見せれば間違い無く己を犠牲にしてでも
記者を潰しにかかるだろう
そして・・・雨宮ツバキをはじめとした管理職の面々は間違いなくサクヤを助ける・・・
脅迫した事実が知れれば今までの取材記録など苦労した
全てが没収・・・消去される
記者がどれほど訴えようと・・・サクヤ達が新種のアラガミに犯された事実など
フェンリル極東支部が認めるはずがない・・・
圧倒的な不利な状況へと追い込まれた記者・・・
だが・・・記者には僅かに勝算があった・・・

「ああ・・・来ましたね・・・。」
極東支部の上空を飛ぶ一機のヘリ・・・
あのヘリこそ・・・記者にとって唯一の希望といえるものであった・・・

Episode 05

カノン　ジーナ　エリナの事件は極東支部に更なる衝撃を与えていた
新種のアラガミがこれほど支部に近い場所で発見されることは今までに無い
しかし、ゴッドイーター達は極東支部運営の為にどうしても必要であり
新種が登場したらからといって彼らを必要以上に休ませることはできない
ゴッドイーター達は常に命を掛けて戦い続けてきたのである・・・
それはこれからも変わることはない・・・

「ようこそ極東支部へ・・・。」
雨宮ツバキが迎えたのは・・・本部からやってきた幹部達であった
「ツバキ君、出迎えご苦労だね！」
やってきた幹部たちは見るからに嫌味で性格の悪そうな男達であった
経歴を調べてもこれといった功績はなく
コネと賄賂で成り上がってきた無能な人物達であった
ツバキにとっては最も顔を合わせたくないタイプの人物であったが
フェンリル本部の幹部・・・という肩書きの手前丁寧に応対するしかない
「長旅お疲れ様でした、部屋を用意していますので。」
「そうかそうか、でわひと休みさせてもらおうか！」
極東支部を我が物顔で歩くその姿に
職員たちも驚きと動揺を隠せないのだった・・・

『ヒバリさん・・・誰ですか・・・あの人達・・・？』
「本部の偉い人みたいですよ、何か・・・突然の視察だとか・・・。」
『へぇ・・・ツバキさんは大変そうですね・・・。』
幹部たちを見つめる二人の少女・・・
オペレーターを務める「竹田　ヒバリ」と
神機整備士の　　「楠　リッカ」であった
神機使い達の裏方として表に出ない仕事をこなす彼女達であったが
ゴッドイーターたちを支える自らの仕事に誇りを持っており
アリサ達には及ばないものの
支部内での人気はかなり高い・・・

極東支部　アナグラ　記者私室・・・
「あぁぁぁっ・・・あぁぁぁっっ・・・。」
サクヤの怒りに触れ恐怖に震えている記者・・・
私室から一歩も出ることができずに怯えていた・・・
そこへ・・・
「ひいいええぇぇっ！！？？」
ドアをノックする音に驚き飛び上がる記者・・・
「何を騒いでおる・・・どうした！？」
扉から入ってきたのはフェンリル本部の幹部の男であった
「ああ、お待ちしておりましたよっ！！」

「それで？　今夜頼めるかね？」
「・・・・・・はい？」
「・・・貴様が連絡してきたんだぞっ！？　アリサを抱けるというから
　私はわざわざこの辺境までやってきたんだっ！！」
アリサのファンであるらしいこの幹部の男は
記者からの報告を受けアリサの為に極東を訪れていた
「いえ・・・それがっ・・・。」

「なんだとっ！！貴様、話が違うではないかっ！！！？？」
「ひえええええっっ！！？？？」
脅迫されていたはずのサクヤに逆に脅され
完全に立場が逆転していることを語った記者・・・
新種に犯されている映像を握っているとはいえ
サクヤは既にそんなものを恐れていない・・・
そして・・・
サクヤとツバキは常にアリサ達女性ゴッドイーターの傍におり
全く手が出せない状況であった
「くそおお・・・ようやくあの体を抱けると楽しみにしていたのにぃ・・・！！」
両手を握り締め悔しそうな表情を浮かべる幹部・・・

「アリサさん達には近づけませんが・・・他の方ならば・・・。」
「・・・どういう意味だっ！？」
記者は幹部にとある映像を見せたのだった
それは・・・
新種のアラガミに犯されているカノン　ジーナ　エリナの姿であった
「こ・・・これが噂に聞く新種の姿・・・なんと・・・！！」
「は・・・はいっ！！　この映像があれば・・・。」
「うん・・・待て貴様・・・カメラは壊されたと言ってなかったか？」
「はい、サクヤさんに破壊されましたが・・・先にメモリーは抜いて・・・。」
「でかしたっ！！！」
「ひいいぃぃっ！！！？？」
「これがあればサクヤを黙らせることができる訳だなっ！？」
「いえ・・・それは不可能かと・・・。」
「なぜだっ！？」
サクヤの決意は固まっており、例えどんな脅迫をしようとも屈しない・・・
むしろこちら側からサクヤに近づき脅迫すれば
その場面をカメラに収められ逆に脅される可能性すらある・・・
サクヤがサカキ博士と頻繁に会っているという情報を得ていた記者は
情報操作を含め・・・
サクヤが既に万全の備えをしている可能性が高いと考えていた

「ぐうううう、では・・・手が出せないではないか・・・。」
「いえ・・・アリサさんは諦めるしかありませんが・・・他の方であれば・・・・」
「・・・誰だっ！？」

極東支部　アナグラ　ロビー

「あら、記者さんどうかされました・・・？」
「こんにちはヒバリさん・・・。」
記者が目をつけていたのは・・・オペレーターの「竹田ヒバリ」
美人オペレーターとして人気が高く
ゴッドイーター達に近づけない以上・・・
幹部が求る最も理想的な女であった
「実は・・・ヒバリさんに見てもらいたいものが・・・。」
「・・・はい？　なんでしょうか？」
「これなんですが・・・。」
「えっ・・・これは・・・なんですかっ！！？」
記者が携帯端末でヒバリに見せたのは・・・カノンたちが犯される映像だった
驚き動揺するカノン・・・
ロビーという場所もありすぐに映像を消すように促すヒバリだったが
「いえ・・・もっと見てもらいたいんですよ・・・最後までぜひっ！」
「な・・・なんで・・・こんなものを・・・・・・記者さん・・・あなたはっ・・・！？」
記者の行動に怒りを露にするヒバリ・・・だが
記者は映像の音声をさらに大きくしてヒバリを脅迫した
「や・・・やめてください・・・そんな映像・・・誰かに見られたら・・・！」
「そうそう・・・私もその話をしたかったんですよ・・・どこかで・・・話せません？」
「・・・・・・・・・。」
記者の要求に応じ、人目の無い場所へ移動する二人・・・
だが・・・
『やあ、ヒバリっ　記者とどこに行くの？』
「リ・・・リッカさん！？」
ヒバリに話しかけてきたのは 「楠リッカ」

「これはこれは・・・美女整備士として有名なリッカさんですか！」
『美女・・・って私のこと・・・やだなぁ・・・そんなことないよっ！』
記者に美女と呼ばれまんざらでは無いリッカ
「リッカさん・・・今はちょっと忙しいから・・・また後でね・・・。」
「いえ、リッカさんにもぜひ来てもらいましょう・・・。」
『何かな、人手がいるなら手伝うよ？』
「ええ・・・どうしても人手が必要なんですよ・・・・・・。」
『ちょっと・・・どういうこと・・・！！？』
「・・・・・・・。」
犯されているカノンたちの映像を魅せられたリッカは動揺を隠せなかった
ヒバリは決して映像を見ようとはせず既に涙を浮かべていた
「いえね・・・この映像が公になったら皆さん困るでしょう・・・？」
『・・・・・・。』
「・・・・・・。」
「そこで・・・お二人に協力していただきたいと思いまして・・・。」
『協力って・・・？』
「なにをすれば・・・？」
記者は二人に　フェンリル本部の幹部と肉体関係を持つように求めた
最初は怒りをあらわにし拒否する二人であったが
本部の幹部を満足させることができれば・・・
この件を最小限の被害で済ませられると教えたのだった
「この映像・・・本部に知れればとんでもない事件となります・・・。」
『・・・私たちが・・・犠牲になれば・・・事件にならない？』
「もちろんです・・・今極東に来ている幹部達を説得できますので。」
「・・・・・・わかりました、でも・・・リッカさんは偶然来てしまっただけです。」
ヒバリは自分だけが犠牲になると記者に伝えた・・・しかし
心優しいリッカがヒバリを見捨てることなどできるわけが無かった
『ダメだよ、ヒバリだけじゃ・・・私もやるから・・・。』
「わかりました・・・お二人はこのまま仕事を続けてください・・・
後ほど本部の方が訪ねた時は・・・お願いします・・・。」

フェンリル極東支部　アナグラ　ロビー

自分への職場へと戻ったヒバリ・・・
だがその表情は固く・・・いつもの元気がまるで無かった
「はぁ・・・なんでこんな事に・・・。」
ゴッドイーターを支えるオペレーターとして本能的に
カノン達を守りたいと決断してしまった・・・
その判断が間違っているとは思わなかったが
多少の後悔は感じていたヒバリだった・・・
「ツバキさんに相談・・・いえ・・・そんなことできない・・・。」
ツバキに相談すれば全てが解決することに繋がるが
記者とトラブルが起きていることは極東支部でも一部の者だけの秘密であった
事態を大きくしたくないという想いから誰にも相談できないヒバリ・・・
そして・・・
「やあ、君がヒバリさんかい？」
「えっ・・・はい、私が竹田ヒバリですが？」
ヒバリの目に入ったのは・・・小太りの見たことのない男・・・
「本部の者だ・・・話は聞いているよね？」
「・・・えっ・・・・・・・・・聞いていますが・・・・・。」
本部の人間ということに気づくとヒバリの表情は曇った・・・
「じゃあ・・・さっそくやらせてもらうよ・・・っ。」
「えっ・・・でもまだ仕事が・・・？」

本部の小太りの男はヒバリのいるロビー内部へとずかずかと入り込み・・・
ヒバリが立っていた場所に台を広げそこに仰向けになったのだった
「さあ、こっちへ来い・・・。」
「・・・・・・・・・・・・・。」
状況が全く飲み込めないヒバリ・・・
男に手を引かれ言われる通りに男の上へと跨った・・・
「きゃっ・・・なに・・・っ！？」
男は既にパンツを下ろし勃起した肉棒を露出していた
そして・・・
ヒバリのタイツを引き裂くと・・・彼女の白い尻を撫で回してきたのだった
「ひあっ・・・ダメですっ・・・こんな場所でっ！？」
「何を言ってる・・・こんな場所だからこそ興奮するんだろうが・・・。」
下着の上から秘部を摩られ・・・体を敏感に反応させるヒバリ・・・
「うっ・・・ううんっ・・・！？」
その時・・・
「やあ、ヒバリ・・・！」
ロビーに現れたのはヒバリの顔なじみの職員
「・・・・・・こんにちわ、仕事は・・・終わったの？」
「ちょっと息抜きに来ただけ、どうしたの？　顔色が悪いよ？」
普段とは違うヒバリの様子に心配する職員・・・
「ええ、ちょっと熱っぽくて・・・・・・。」
「そっか、無理しないほうがいいよ・・・また今度ね！」
「ええっ、またねっ！」

職員と話す間・・・ずっと秘部を指でモテそばれ続けていたヒバリ・・・
全身から汗を流し、既に疲れきった様子を見せている
「お・・・お願いです・・・今は許してください・・・。」
「ダメだ・・・。」
「そ・・・そんなぁ・・・・・・。」
そして男は、ヒバリの秘部へと肉棒を押し当てると・・・
先端をゆっくりと挿入させていった
「ひぁぁっ！？」
思わず声を上げるヒバリ・・・
幸いなことに周囲には誰もいなかった
「ほら・・・もっと腰を下ろせ・・・。」
男はヒバリに自分の上に肉棒を挿入したまま座るように指示した・・・
逆らうことのできないヒバリは言われるままゆっくりと腰を下ろした・・・
「んんんっ・・・・・・！！？？？？？」
ヒバリの膣内に一気に根元まで挿入された肉棒・・・
涙を浮かべ息遣いが荒くなるヒバリ・・・
男は小刻みに腰を振り続けヒバリの体を下から突き上げた・・・
「うっ・・・あううっっ・・・・・・あぅ！！？？」

人通りの多いロビーで男に犯されるヒバリ・・・
ヒバリはそんな姿を誰にも見られないように必死で平常を装っていた
激しく突き上げられる肉棒にヒバリの乳房は大きく揺れていた・・・
「あふっ・・・だめ・・・・・・こんなの・・・っ・・・。」
しかし、必死に耐えるヒバリの前に・・・

「ヒバリさん、今大丈夫ですか？」
「レ・・・レンカさん・・・！？」
ヒバリの前に現れたのは・・・ゴッドイーター「レンカ」であった
「ど・・・どうされたんですか？　レンカさん。」
「あの・・・サクヤさんやアリサについて何か聞いていませんか？」
「えっ・・・いえ、私は特に聞いていませんっ・・・が・・・っ！」
「そうですか・・・・・・。」
「な・・・何か気になることでも・・・？」
「いえ・・・ちょっと様子がおかしいので・・・ツバキさんもピリピリしてるし。」
「・・・・・・・・・うっ・・・あっ・・・・・・。」
男はレンカを会話するヒバリに対して・・・さらに激しく腰を振る

「ヒバリさん大丈夫ですか？体調が悪いんじゃ・・・？」
「ええ・・・す・・っ少しだけ・・・ぇ・・・熱があるみたいで・・・っ！！」
「無理しないほうがいいですよ・・・。」
「ええっ・・・あと少しで勤務時間が終わりますからっ！！！」
「そ・・・そうですか・・・！？」
ヒバリの迫力ある表情に押され思わず言葉を詰まらせるレンカ
そして・・・
男の肉棒がヒバリの膣内で大きく脈打つと・・・
ヒバリの膣内で男は射精してしまったのだった・・・
「うあっ・・・嘘っ・・・・・・こんなっ！！！？？」

「・・・・・・大丈夫ですか？」

ヒバリの様子に真剣な表情で心配するレンカ・・・

「あぁぁっ・・・大丈夫ですっ・・・今無線で話してまして・・・っ・・・・・・。」

「あ、そうだったんですか・・・お邪魔しました！」

ヒバリの仕事の邪魔になっていると感じたレンカは足早に立ち去って行った

誰もいなくなり男と二人きりになったヒバリ・・・
その瞳からは大粒の涙が溢れ流れ落ちていた・・・
「ひぐっ・・・なんで・・・中に出すなんて聞いてませんっ・・・。」
「記者が言ってなかったか？　そりゃ悪かったなぁ・・・。」
悪びれる様子もなく笑みを浮かべる男・・・
「ほら・・・口で綺麗にしろ・・・！」
「は・・・はいっ・・・・・・。」
ヒバリは射精したばかりの精液の付いた男の肉棒を口に運び・・・
根元まで綺麗に舌で舐め回した・・・
すぐ横を極東支部の職員が行き交う中で・・・二人のセックスはしばらく続いた

極東支部地下・・・技術開発室　神機保管庫・・・

『・・・・・・・・・。』
無言のまま黙々と神機の整備を続けているリッカ
しかし、その指先は震え集中できていない様子だった
先ほど記者に言われたことが頭から離れないでいるのだった
『はぁ・・・嫌だ・・・・・・今夜、本部の人と寝るだなんて・・・。』
ゴッドイーターたちの為に全てを捧げてきたリッカだったが
そのために自分の体を捧げることになるとは想像もできないかった・・・
『はぁ・・・こうやってずっと神機の整備をしてたいよ・・・。』
神機の整備をしている時がリッカにとって一番の安らぎの時間でもあった
しかし・・・
この後に待ち受けている悪夢の存在を考えてしまうと
そんな安らぎの時間を落ち着いて過ごすことができない・・・

「こんにちはリッカさん？」
『ひいっ！？？』
突然背後から声を掛けられ驚いた様子のリッカ
『あ・・・あなた達、ここは立ち入り禁止ですよ！？』
「問題ありません、我々は立派な関係者ですから・・・。」
『・・・・・・あの、もしかして本部の・・・？』
「・・・ええ、そうです・・・。」
リッカの目の前に現れたのは3人の中年男性達・・・
亡くなった父親よりもはるか年上の男達であった・・・
『嘘でしょ・・・こんな人たちと・・・・・・。』
「・・・なにか？」
『・・・いえ・・・こんな場所に何か御用ですか？』

「記者の方から話は行っていますね・・・ならお解りのはず・・・。」
『・・・・・・まだ仕事が残っていますので・・・。』
「いやいや、こちらの仕事を優先してもらわないと・・・。」
そう言うと・・・男達はリッカの目の前で服を脱ぎ始めたのだった
『いやぁぁっ、な・・・何してるんですかっ！？』
顔を真っ赤に染め突然の出来事に動揺するリッカ
そして・・・男達はリッカの周りに集まり肉棒をリッカの口元へと寄せた
「ほら・・・早くしてもらえんかね・・・？」
『・・・えっ・・・・・・！？』
動揺し状況が把握できないリッカ・・・
そんなリッカの姿に耐え切れなくなった男は
リッカの口内に強引に肉棒を押し込んだのだった・・・
『んんんっ！！！！？？？？』
「はぁ・・・・・・いいぞ・・・とても気持ち良い・・・っ！！」
リッカの頭を抱え腰を振る男・・・
そして・・・他の男達はリッカの背後から服の中へと手を入れ
乳房を揉み・・・
作業着を下ろし下着の上から秘部を撫で回し始めた
『んああぁぁぁぁぁっっ！！！？？？』
必死に手足を暴れさせるリッカだった・・・
「こら暴れるな・・・あの映像のことを忘れたのかっ！？」
『！！？』
苦しさのあまり忘れていたが・・・
カノン達のあの映像の為に自分が犠牲になると決断していた・・・
リッカはようやく状況を受け入れおとなしくなり
男の肉棒を慣れない舌使いで音を立ててしゃぶりはじめた・・・
「よしよし・・・それでいい・・・。」
おとなしくなったリッカの体を男達は更に攻め立てた
「ほら・・・ここに座れっ！」
男の肉棒の上に座るように求められたリッカ
『・・・うっ・・・嫌だっ・・・・・・それは・・・』

反抗的な態度を見せるリッカだったが
映像の事があるために抵抗することはなかった
『うっ・・・ああぁっ・・・入って・・・るっ・・・嫌だァ・・・・・・！！』
大粒の涙をこぼしながら男の上へとまたがるリッカ・・・
肉棒は根元まで完全にリッカの膣内へと収まっていた

『うあああぁぁぁぁ・・・・・・っ・・・痛っ・・・・・・・・・！！？？』
「なんだ処女だったのか・・・悪かったなリッカちゃん・・・。」
男は少しの罪悪感もなく激しく腰を降り始めた
『ひあああぁぁぁぁぁぁっっ！！！？？？』
始めて感じる激しい刺激にリッカは悲鳴を上げた
「ほら・・・こっちもしゃぶれっ！！」
左右から差し出される肉棒を涙を流しながら必死に咥えるリッカ・・・
リッカにとって神聖な職場である神機保管庫で
激しく男達に犯されるリッカ・・・
それはリッカが思い描いていたセックスとはまるで違う悪夢のような時間だた

口中に広がる不思議な味と
鼻につく異臭・・・
肉棒を喉の奥にまで押し込まれ苦しさのあまりリッカの意識は朦朧としていた
『んっ・・・んんっ！！！！？？』
下から肉棒で突き上げられる度にリッカの小振りな乳房は揺れ
瞳からは涙がこぼれ落ちていた
「よぉし・・・しっかり飲み込むんだぞっ！！」
『んんんんっっっ！！？？？』
一気に口内に溢れる熱い精液・・・
勢い良く射精された苦く熱い精液にリッカは顔を真っ赤にしていた
男はリッカの頭を抱えたまま決して離そうとはせず
溢れ出る精液をリッカは自然と飲み込んでいったのだった・・・
『あはぁぁっ・・・げほげほっ・・・！！！？？？』
あまりの苦しさに肉棒を吐き出したリッカだったが
「ほら・・・こっちだこっちっ！！」
『いっいやぁぁっ・・・！！』
すぐに別の男の肉棒がリッカの口内へと押し込まれ
再び喉の奥にまで到達する・・・
ひたすら男達に言い様に弄ばれるリッカ・・・

「ようし・・・リッカちゃん中に出してやるからなっ・・・！？」
『んあっ・・・やめてっ・・・・・・中にだけはっ・・・ダメぇぇっ・・・！？？』
残された僅かな体力で必死に抵抗するリッカだったが
男達はリッカを押さえつけ
無情にもリッカの膣内に大量の精液が注ぎ込まれていった
『うあああぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！？？？』

『うぐうっ・・・あぐうっ・・・・・・！！！？？』
ドクドクと脈打つ長い射精・・・
リッカは全身を痙攣させ歯を食いしばり必死で耐えていた・・・
「気に入ったぞリッカちゃん・・・この後俺の部屋に来るように・・・いいな？」
『・・・ひっ・・・ひぐっ・・・ひゃいっ・・・・・・っ・・・っ。」』
泣きじゃくるリッカを放置し・・・男たちはひとまずその場を後にしていった
疲れきった様子のリッカはしばらくの間、その場から動くことができなかった

そして・・・夜・・・
仕事を終えたリッカとヒバリは・・・それぞれアナグラにある
重役専用の客室へと足を踏み入れていく・・・
二人の表情は重く・・・足取りは重かった
「ふうむ・・・もったいない・・・ぜひ記録に残したかったですが・・・。」
その様子を廊下の隅から覗いていた記者・・・
サクヤ達の動きを警戒した為、今回の撮影は断念していた
しかし、フェンリル本部の幹部にこれで十分な恩を売ることができ
味方につけることに成功した記者・・・
これでツバキやサクヤとは対等といえる状況まで近づいた・・・
しかし・・・
これだけの問題を起こしておきながらも・・・
記者の頭の中には新種とゴッドイーターの大スキャンダルを
世間に知らしめることしかないのだった・・・
そしてその「野望」は・・・すぐに実現することとなる・・・

Episode 06

極東支部で始まったゴッドイーターの密着取材は大きな山場を迎えていた
女を襲う新種のアラガミの存在を隠そうとするフェンリル本部は
記者の手に入れたスキャンダルを決して認めようとはしなかった・・・
それがきっかけとなり更なるスキャンダルを求めた記者は暴走・・・
女性ゴッドイーター達がアラガミに襲われる様子を撮影し
それを脅迫に利用していた
しかし・・・
サクヤは記者の行動の犠牲となった仲間たちの姿を見て決意・・・
記者に対して立ち向かうことを決めたのだった
そして上司であるツバキと共に記者に対する包囲網を強めていった・・・
脅迫が効かなくなったサクヤに怯え部屋に篭る記者であったが
本部からやってきた幹部達に脅迫したリッカ　ヒバリ　を捧げたことで
彼らを味方につけることに成功していた・・・
そして・・・場所は極東支部　支部長室・・・
集まっていたのは記者と本部の幹部数名・・・
対するは雨宮ツバキ　サクヤ　アリサ・・・そしてサカキ博士・・・
サカキ博士は中立の立場としてこの場にやってきていたが、
本質はサクヤ派であり、
サクヤ達を中立という立場を取り援護する構えであった・・・

「シックザール支部長！！　いい加減に結論を出していただけませんかな！？」
シックザールに強く結論を求める幹部・・・

サクヤ達からは密着取材の即時中止と極東支部からの退去・・・
そして密着の際に記録した全てのデータの一時提出を求められていた
密着取材にふさわしくない画像を全てチェックした上で
返却するといったものであった
サクヤ　ツバキの覇気は凄まじく・・・記者がひとりであったなら
この場に耐え切れずにすぐに条件を飲んでしまっていただろう・・・
しかし・・・
本部の幹部達が味方についている以上・・・形勢は互角といったところであった
「馬鹿げているっ！！我々の取材に問題など無いっ！！」

「しかし、その記者が彼女達のプライベートな面まで
密着していたのは事実であります！」
本部の幹部に対しても全く引くことがないツバキ・・・
「た、たしかにこの記者にも問題があったのは認めよう・・・
だが、過ぎたことだ！！」
「過ぎたことでは済まされません！！」

互いに怒鳴り合う状況が続く中・・・
シックザール支部長が重い腰を上げて立ち上がった
「・・・ツバキ君、本部の方に対し少々言葉が過ぎるのではないかね？」
「・・・・・・・・・失礼しました・・・。」

「そして・・・。」
シックザールは幹部の方へと向きなおすと・・・彼らを鋭い目つきで睨みつけた
「うっ・・・。」
その冷たい目に思わず言葉を失う幹部達・・・
シックザールはあくまで中立の立場としてこの場を納めるつもりだったが
極東支部で本部の関係者が好きに行動することは好ましくなく
できればすぐにでも本部に帰還してほしいと心の中では思っていた
「いくら本部の人間とはいえ・・・これ以上好き勝手に取材されては迷惑です。」
「だ・・・だがシックザール・・・我々は本部の許可を・・・。」
「ここは本部ではありません・・・はるか遠い極東の地です！」
「・・・・・・。」
「支部長である私が・・・最終決断をさせて頂く・・・双方とも異論はないですね？」
「・・・・・・。」
「・・・・・・。」
シックザールの威厳ある態度に部屋は静まり返っていた
「では・・・密着取材は残り三日を期限とする・・・
過ぎ次第即極東支部からは退去して頂く
　　そして取材記録はこちらで一度目を通し、
必要の無いと判断した箇所は消去する。」

「な・・・なんだとシックザール・・・あと三日だとっ！？」
「そ・・・そうですよ・・・たった三日で何ができると・・・それに私の取材記録まで・・・。」
「これ以上議論する必要はありません、これは決定事項です。」

残り三日という期限に納得が行かない本部のメンバー達・・・
そして・・・
即時退去は叶わなかったが・・・
残り三日間程度ならば・・・と安堵の表情を浮かべるサクヤとツバキ・・・
サカキ博士
取材記録にも調査が入ることが決定し、
幸いにもサカキ博士が担当することとなる・・・
もちろんサカキ博士はツバキやサクヤ達に全て任せることになるだろう
しかし・・・
そうなれば取材記録のうち　残されるのは
刺激の少ない平凡なゴッドイーターたちの任務風景だけとなる・・・
アラガミに犯され喘ぐ美女達の姿や・・・その表情など・・・
貴重な記録は全て破棄されることになるだろう・・・

「なんとかならないんですかっ・・・！？」
「うるさいっ、ワシらにも限界はあるっ！！」
本部の幹部達に食い下がる記者であったが
幹部達の力を持ってもすぐにはどうにもならない・・・
本部と掛け合い極東支部長の命令を撤回させる必要があるが
本部を納得させるだけの証拠など持ち合わせていない・・・
記者の思惑とは逆に役たたずとなってしまった本部の男達・・・

なんとか取材記録を守り抜こうと・・・
あらゆる手段で極東支部外部へとデータを移そうと
試みる記者であったが・・・
「だ・・・ダメです・・・妨害されていますっ・・・！？」
サカキ博士の対処によりデータのバックアップは不可能となっていた
「な・・・なんとかしないと・・・何としても・・・どんな手段を持っても・・・。」

取材期間が残り三日を切っていた・・・しかし
カメラを持ち支部を駆け回る記者だったが
ゴッドイーターたちは彼らを警戒し、全く姿を見せようとはしなかった

「サクヤさんたちが任務！？　ならば私も同行をっ・・・！？？」
「危険な任務ですので・・・お引き取りください。」
脅迫していたオペレーターのツバキからも冷たい反応しか帰ってこない
極東支部全体が敵となっているようだった・・・
「・・・ああ、ソーマさん　レンカさんっ・・・今みなさんどちらに・・・！？」
「失せろ・・・。」
「・・・・・・・・・。」
記者を睨みつけるソーマと無言のレンカ・・・その瞳には怒りが満ちていた
「ひ・・・ひぃっ・・・・・・。」

「サクヤ・・・あと二日だが何か問題は起きてないか？」
「ありがとうツバキさん、みんなが協力的になってくれていますので。」
「アリサ・・・お前の方はどうだ・・・？」
『・・・えぇ・・・問題はありませんツバキさん・・・。』

全てのゴッドイーター達がサクヤ達に協力的な態度を示していた
女性達はもちろんの事だが
詳しい事情を聞かされていない男性ゴッドイーター達も
記者たちから幾度もセクハラ行為を受けたと話しただけで
非常に協力的になり記者たちを遠ざける努力をしてくれている
男性達にとっても無礼な取材を続ける記者の存在が迷惑なものとなっていた
まして命を駆ける仲間達を侮辱されたとなれば・・・
まるで自分のことのように怒りを見せる男性ゴッドイーター達であった

「チクショー・・・あの記者最低だぜっ、よくもサクヤさんにセクハラをっ！！」
人一倍の怒りを見せていたのは　コウタ・・・
「落ち着けコウタ・・・その勢いで暴力に出ちゃイカンぞ。」
冷静を装っているが内心はコウタ以上に怒りに震えているリンドウ・・・
その言葉はコウタではなく自分自身に言い聞かせているようだった
「落ち着くのはお前だ・・・リンドウ。」
そこへやってきたのはソーマとレンカ・・・
「なんだソーマ・・・俺は冷静だぞ・・・？」
冷静さをアピールするリンドウであったが・・・
「いえ・・・リンドウさん・・・汗が・・・。」
レンカに大量の汗を指摘されたリンドウ・・・
まるで運動してきたかのように汗を流し、
タバコを吸う様子にも落ち着きが無かった
「い・・・いや、これはだなっ・・・！？」
リンドウの様子に呆れた様子のソーマ達であった・・・
だが、彼らの目には記者の横暴に対する怒りが込められており
これ以上勝手な真似はさせないと決意していた・・・
しかし・・・
あと二日を切ったところで極東支部に大きな事件が起こることとなる・・・

突然、極東支部に鳴り響く警報・・・
その警報は通常のアラガミ襲撃を知らせるものではなく
特別な事件が発生した際に鳴らされる緊急招集を告げるものであった・・・
その事件とは・・・
「エイジス計画」成功の為に欠かせない重要な作戦「メテオライト」
新開発された装置によりアラガミを誘導させ殲滅させる作戦であった
しかし・・・当初は想定通りの動きを見せるアラガミであったが
装置に不具合が発生したらしく、アラガミ達は予想外の行動を見せていた・・・
アラガミ達が向かっていたのは・・・
リンドウ達が極秘で支援する山間の避難施設・・・
極東支部に入れない人々が密かに暮らす集落であった
この緊急事態にゴッドイーターが召集される事態となっていた・・・

そして、この最後の機会を記者が逃すはずもなかった・・・

極東支部アナグラ　作戦室

「リンドウ・・・無事でいてくれ・・・。」
作戦室でリンドウの無事を祈るツバキ・・・
リンドウは自分の支援する想い入れのある施設ということもあり
自ら先行して偵察を志願し既に出撃してしまっていた・・・
「リンドウ・・・無茶しないといいけど・・・。」
「すぐに応援に向かいましょう！」
「行くしかないでしょ！！」
『・・・・・・・・・いきましょう。』
サクヤ、レンカ、コウタ、ソーマ、アリサの４人は
すぐにリンドウの応援に向かうことを志願していた
しかし、４人の中でアリサだけ様子がおかしいように感じられた
「アリサ・・・顔色が優れないようだが・・・？」
命の危険がある以上・・・貴重なゴッドイーター達に無茶をさせることはできない
ツバキは体調の悪そうに見えるアリサを心配していた
『問題ありません・・・すぐに出動できます。』
「そうか・・・わかった・・・。」
ツバキは集まったゴッドイーター達にリンドウの援護を指令する

「待ってくださぁい・・・！！」
突然作戦室へと入ってきた記者・・・
「どうか・・・どうか私を同行させてくださいっ！！」
ゴッドイーター達に密着することを求る記者であったが
当然、ツバキが首を縦にふることなどない・・・
「却下する・・・！」

「で・・・ですがっ・・・！？」
しかし、記者にとっては最後のチャンスということもあり・・・
引き下がろうとはしなかった
「わかっているのか？アラガミが群れで迫っているのだ！
お前に構っている余裕などない」
ゴッドイーター一人一人が命を掛けて戦う作戦・・・
記者のお守りをする余裕のある人物などいない・・・
「もちろん！私に護衛は必要ありませんっ！！」
「なにっ！？」
「マジかあのおっさん・・・！？」
「正気かよ・・・っ？」
『・・・・・・・・・。』
自分の身は自分で守ると言い張る記者に唖然とする一同・・・
だが・・・
「そんなことを許可できると思うのか？勝手な事を言うなっ！！」
眉間にしわを寄せ激怒する雨宮ツバキ・・・
「絶対に許可することはできない・・・、取材が許されるのは支部周辺の
危険が少ない地域に限定されている。」
「そ・・・そんなっ・・・！？」
記者の勝手な行動が目立ってきた為に
極東支部は密着の際には複数のゴッドイーターを護衛につけること・・・
取材は支部周辺の地域に限ること・・・など
厳しい条件を新たに決めていたのだった
ガックリと肩を落とし・・・部屋から立ち去っていく記者・・・
「くそぉ・・・私がどれほど苦労して装置に細工を・・・・・・。」

リンドウが出撃した現場はもはや戦場と化していた
誘導装置により集結したヴァジュラの大軍がリンドウを取り囲んでいたのだった・・・
「まったく・・・少しは・・・休ませて欲しいね・・・。」
既に長時間戦闘を続けていたリンドウ・・・顔には疲労の色が見えていた
その時・・・
上空に姿を現したフェンリルの輸送ヘリ・・・
「やっと来てくれたか・・・パーティーは始まってるぞ。」

「リンドウを発見しました・・・すぐに降下します！！」
リンドウの元へとすぐに飛び降りようとするゴッドイーター達であったが・・・
突然、極東支部から緊急連絡が入ったのだった・・・

（サクヤ、アリサはヘリで待機しろ！　他の者はすぐに降下しリンドウを援護！）
「え、ツバキさん・・・なんで私たちは！？」
目の前で必死で戦うリンドウを前にして待機を命じられるサクヤは
納得がいかない様子であった
（一部のヴァジュラがおかしな行動を見せている・・・
このままでは極東支部へと向かう可能性が高い！）
「そんな・・・では私たちは・・・？」
『・・・・・・・・・。』
（上空からヴァジュラを追跡し、支部へと到達することを阻止しろ！）
「了解・・・。」
『了解しました、・・・・・・・サクヤさん・・・・・・。』

レンカ　ソーマ　コウタを降下させ支部へと引き返すヘリ・・・
リンドウ達を置き去りにするような気分になるサクヤは
胸が引き裂かれんばかりであった
しかし・・・
ツバキの情報通り、
一部のヴァジュラが極東支部へと向かっているのは事実であった・・・
上空からも高速で移動するヴァジュラの群れが確認することができた・・・
「なぜだ・・・なぜアナグラへと向かっているのだ・・・？」
作戦室で衛星からの映像を見つめるツバキ・・・
「ツバキ君・・・これはありえない行動だよ・・・何らかの力が作用しているようだ。」
ツバキと共にサカキ博士も納得がいかない様子であった
「博士・・・何らかの力とは・・・？」
「ふうむ・・・単なる装置の故障が原因だと考えたいところだが・・・
　　この極東支部にアラガミを引き寄せる原因があるのかもしれない・・・。」
「引き寄せる原因・・・そんなものが考えられるのですか！？」
「現在、アラガミが襲撃することによりもっとも利益を得るのは誰だと思う？」
「・・・まさか・・・あの記者が・・・！？」
「・・・・・・・・あくまで推測だが・・・彼から話しを聞いたほうがいいね。」
「わかりました・・・すぐにあの記者を拘束しろ！！」
「はいっ！！」

極東支部へと接近するヴァジュラ達・・・
既に支部には防衛班のゴッドイーター達が配備されていたが
カノン　ジーナの二人はアラガミに弄ばれまだ体調が万全とはいえず・・・
訓練生のエリナは出動が許可されない
僅かなゴッドイーター達が守る極東支部へと到着したサクヤとアリサ

『・・・想像よりも早かったですね・・・。』
「ええ、ツバキさんの判断は正しかったわ・・・・・・。」
極東支部へと迫るヴァジュラの数はより増していた・・・
二人が援護に駆けつけなければ支部に大きな被害をもたらしていたのは間違いない
背後にそびえるアナグラ防護壁・・・そして極東支部を守るために
サクヤとアリサはヴァジュラの群れの中へと走り出していった・・・

『はああぁっ！！！』
「アリサ危ないっ！！！」
『サクヤさんっ！？』
数の多さに苦戦させられるサクヤとアリサであったが
苦戦しつつもヴァジュラを次々となぎ倒していく二人・・・
その華麗な動きと豪快な神機さばきに魅了されない者などいない・・・
「素晴らしいっ・・・サクヤさんアリサさんお見事ですよっ！！」
「えっ！？」
『なにっ！？』

二人の耳に入ってきたのは・・・最も耳にしたくない声であった
振り返ると・・・ガレキの中に隠れながら二人にカメラを向ける記者の姿があった
『正気ですか・・・？』
「まったく・・・何を考えているのよ・・・！」
アナグラ周辺であれば密着を許される記者・・・
二人の姿をカメラに納める為に支部を抜け出していたようだ

「ツバキさん・・・戦場にあの記者が来ています・・・！」
（なんだと・・・まさかアイツ・・・！？）
「すぐに回収を求めます・・・作戦の邪魔です！！」
（わかった・・・なんとか対処してみよう・・・。）
目障りな記者を支部に回収することを求るサクヤ・・・
彼が背後にいては作戦に集中することもできない・・・
だが・・・ヴァジュラで溢れた戦場に回収班を送り込むことは危険過ぎる行為であり
簡単に決断できることではなかった
しかも・・・
支部長のシックザールはツバキの要請を却下・・・
記者の行動に問題があることは認めたが
同時に記者は与えられた権利を守り密着しているのも事実であった
「ですが・・・彼が装置に何か手を加えた可能性があるのです！！」
「それは憶測にすぎない・・・、事実であった場合は適切に対処しよう。」
「・・・・・・・・・。」
「気持ちは解る・・・だが今回収部隊を出せば・・・結果はわかっているだろう？」
「はい・・・高確率で部隊は壊滅するでしょう・・・。」
支部としても無茶な危険を犯すことはできないのであった・・・

『はぁ・・・はぁ・・・ずいぶん・・・数が減ってきましたね。』
「ええ、これから支部を守りきれる・・・。」
戦闘を続ける二人も疲労の色を隠せなかった・・・
しかし・・・そんな二人の前に予想しない強敵が姿を表すことになる・・・
『きゃっ！？』
「くっ！！」
強風が吹き荒れ・・・
土埃が舞い、視界が遮られる中から黒い影が姿を現した・・・
「アリサ・・・来たわよっ！！」
『はい・・・・・・あれはっ・・・・・・！？』
ゆっくりと近づき・・・姿を現したのは・・・
アラガミ　ヴァジュラ神属禁忌種・・・「ディアウス・ピター」　であった
巨大なその姿を目にした途端・・・
『うあああぁぁぁぁぁぁっ！！！？？』
「！！？」
アリサは雄叫びを上げ一気にピターへと飛びかかっていった・・・
その様子に一瞬唖然とするサクヤだったが・・・
すぐにアリサの援護を開始した・・・

ピターとの激しい戦闘を繰り広げるアリサとサクヤ・・・
その様子をしっかりとカメラに納める記者・・・
防護壁に近い場所で・・・激しい戦いが繰り広げられていた・・・

だが・・・
「嘘・・・こいつはっ！？」
ピターと戦うアリサ・・・それを妨害するようにサクヤの前に立ちふさがったのは・・・
アラガミ 「プリティヴィ・マータ」
ピターと同様にヴァジュラ神属に族する、
人間の女性のような顔を持ったアラガミ・・・
しかし・・・
女性のような顔立ちとは違い・・・体からはとある物体が垂れ下がっていた
「そんな・・・こいつまさか・・っ！」
「やはり・・・ついにきましたよっ・・・最高のシャッターチャンスが・・・！？」
それは間違い無く人間の肉棒を持った新種のアラガミであった・・・
「ひいいっ！！！？？」
以前に新種に襲われたこともあり恐怖に怯えるサクヤ・・・
だが・・・ここで引き下がるわけにはいかない・・・

必死にマータと戦い続けるサクヤだったが・・・
『きゃああぁぁぁっ！！！！？？？』
突然聞こえて来たアリサの悲鳴・・・
振り返ると・・・ピターの一撃を受け倒れ込んだアリサの姿があった・・・
「アリサッ！？」
その僅かな隙がサクヤの運命を分けることになった・・・
一気にサクヤへと迫ったマータの一撃を避けることができなかった・・・
「きゃああぁぁぁぁっ！！！」
吹き飛ばされ倒れ込んだサクヤ・・・

『あっ・・・あぁっ・・・来ないでっ・・・パパ・・・ママ・・・っ！』
神機を手放してしまい・・・追い詰められたアリサは少女のように怯えていた・・・
以前にサクヤが目にした精神状態と同じであった
迫るピターから必死に逃げようと這いずり回るアリサだったが・・・
『いやぁぁっ、助けてぇぇっ！！！！！？？』
背後から迫ったピターに覆いかぶさられてしまった・・・
そして・・・
ピターの股間にオラクル細胞が集結・・・巨大な肉棒が形勢されていった
『いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！？？？』
ピターはその肉棒をアリサの秘部へとグイグイと押し当て
強引に膣内へ挿入させようとしていた・・・
『痛いっ・・・パパ痛いよぅっ・・・あぁぁぁぁぁっ！！！！？』
大粒の涙を流すアリサの膣内に・・・ピターの肉棒が音を立てて挿入されていった

『あっ・・・あがぁぁ・・・・・！？』
「ア・・・アリサ・・・！？」
ピターは肉棒を挿入すると・・・
ゆっくりと体を揺さぶりアリサとの激しい交尾を開始した・・・

『ひあああああぁぁぁぁっっ！！！！？？？』

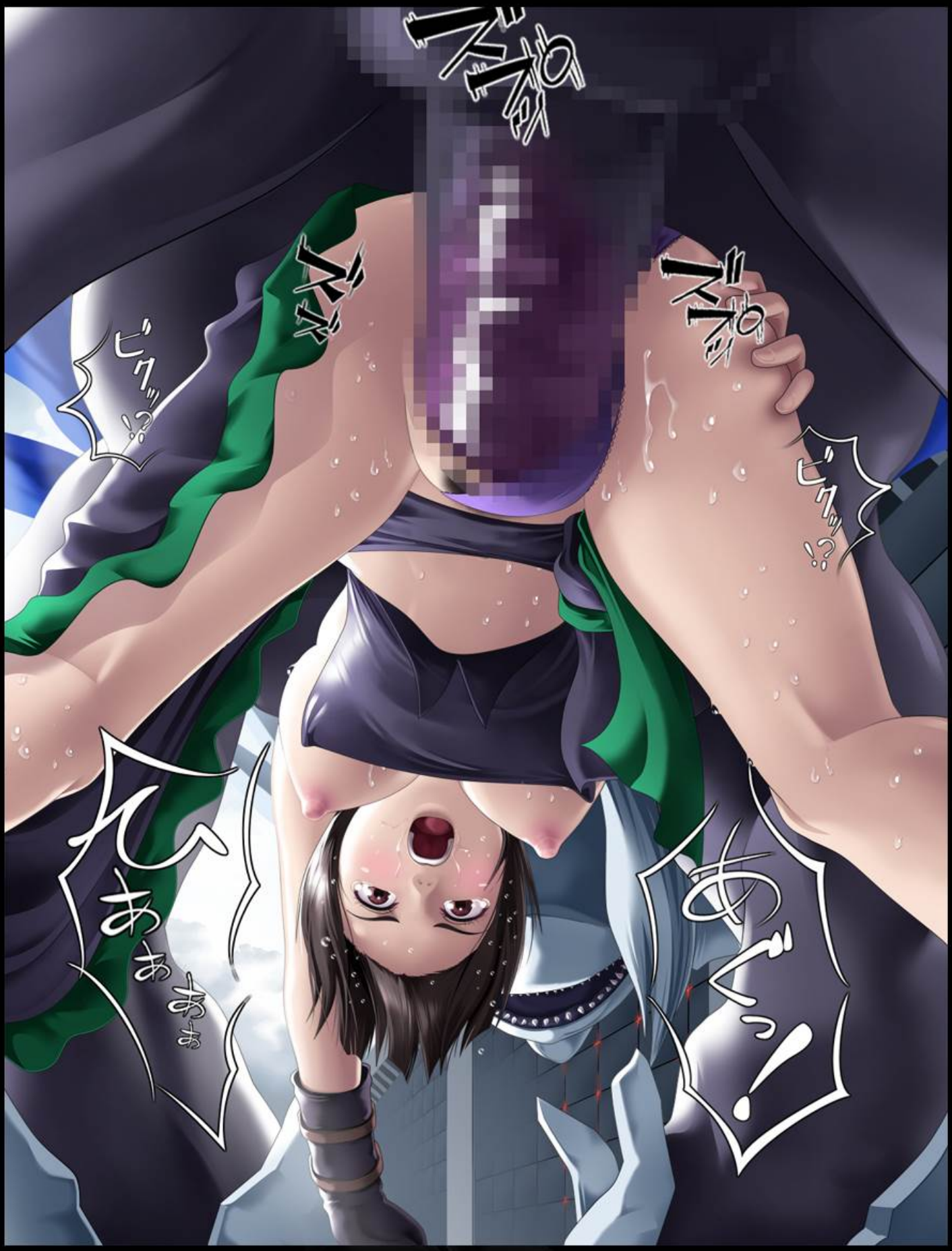
その激しさに泣き叫ぶアリサだったが・・・どこか様子がおかしかった

『あはぁっ・・・あぁぁぁぁパパっ・・・気持ちいぃよぉっ・・・・！！！？？？』

ピターとの交尾を喜んでいるかのように叫ぶアリサ・・・

「アリサ・・・ダメよしっかりしてっ・・・！！」
必死に立ち上がりアリサの元へと向かおうとするサクヤだったが・・・
背後からマータがサクヤへと近づき・・・
強引にサクヤを押し倒した・・・
「きゃああぁぁっ！！！！？？」
マータの股間にはピターと同様の勃起した巨大な肉棒が
サクヤの膣内に入り込もうと、まるで待ちきれないといった様子であった
「ダメよっ・・・やめてっ、挿れないでっ！！！？？」
必死に逃れようとするサクヤだったが・・・
肉棒はサクヤの秘部に密着・・・一気に膣内へと入り込んできた
「いやああぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！？？？」

「あっ・・・あがぁぁっ・・・！！？？？？？」
『あはぁぁぁっぁぁぁ・・・いいっ・・・もっと・・・もっとぉっ・・・！！！！！』
苦痛に満ちた表情を浮かべるサクヤと
快楽を感じ笑みを浮かべるアリサ・・・
アラガミに犯され対照的な反応を見せる二人・・・
その様子をじっと見つめる一人の男の姿があった・・・



「すごい・・・これはすごい・・・これを今こそ・・・世界に伝えねばっ！！！」

この瞬間を待ち望んでいた記者はカメラを構え・・・

持ち込んでいた機材のスイッチを入れた・・・

フェンリル極東支部・・・避難所・・・

「・・・あれ・・・？なんだ？」

「おいおい・・・これって・・・！？」

突然、避難所に設置されていたテレビの映像が切り替わり・・・

不思議な映像が映し出された・・・

そして・・・

画面に映し出されたのは
笑顔で喘ぎ声を上げるアリサと・・・涙を流し叫ぶサクヤの姿であった
「これ・・・サクヤさんっ・・・！？」
「アリサちゃん・・・なんだこれっ・・・！？」
画面を見ていた人々は言葉を失っていた

「何が起こっているっ！？　すぐに放送を中止しろっ！！」
突然の出来事に混乱する極東支部・・・
「大丈夫っ・・・す、すぐに何とかするよっ！！」
普段はのんびりとした様子のサカキ博士も焦りの色を隠せない
スキャンダルをもみ消された記者はどんな手段を持っても
新種とゴッドイーターの真実を世界に伝えようとしていた・・・
その為に時間をかけ極東支部全体へと映像を中継するシステムを独自に用意し
メテオライト作戦を利用し、装置をハッキング・・・
支部へとアラガミを引き寄せるという
常軌を逸した行動に出ていたのだった・・・

「あれ・・・？消えたぞっ！？」
「なんだおいこれで終わりか？もっと見せろよっ！」
「サクヤさんが泣いてるぞ・・・？」
「アリサちゃんなんで笑ってるんだ？」
画面が突然消えたことに不満を見せる市民達・・・

「・・・どうなってるサカキ博士っ！？」
「落ち着いてくれっ！シックザール！　避難所に流れていた映像はストップした！！」
「だがこのテレビには映像が流れているぞっ！」
避難所には緊急時の際に混乱を避ける為や
情報規制を行うためのシステムが備わっており
簡単に映像の遮断を行なうことができた
しかし・・・
フェンリル職員達が暮らすアナグラは安全の為に
外部とは全く違うシステムが備わっている・・・
アナグラ全体に流れている映像を止めるにはサカキ博士とはいえ簡単ではなかった
「サカキ博士っ！！！」
「わかっている・・・わかっているよっ！」

その間も・・・アナグラ全体にサクヤとアリサの姿が映し出されていた
多くの目がサクヤとアリサがアラガミに弄ばれる姿を目にしていた・・・
そしてそれを目にした
男性職員のほとんどが無言のまま画面を見つめ股間を大きくふくらませていた

「サカキ博士どうなっているんですっ！！？」
シックザールとサカキ博士の元へとやってきたツバキ・・・
「言いたいことはわかっているよツバキ君、僕も必死なんだっ！」
「・・・ですが・・・このままでは・・・！？」
焦るツバキとサカキ博士の横で目を閉じたまま考え込んでいる様子のシックザール

「・・・・・・電源を落としてください・・・サカキ博士！」
「・・・ツバキ君・・・言っていることがわかっているのかい？」
「もちろんです・・・！！」
極東支部全体の電力を一時的に落とすことを提案したツバキ・・・
だが、それは極東支部全体のシステムが一時的にダウンすることになる
それがどれほどの事態を引き起こすのか・・・想像もできなかった
ゴッドイーター達の支援さえも一時的に不可能となる・・・
アラガミが防護壁を突破するという危険も残されているのだった・・・

「・・・いいだろう・・・やってくれサカキ博士・・・。」
考え込んでいたシックザール支部長は・・・ツバキの提案に同意した
「支部長・・・。」
「わかったよ・・・・・・。」

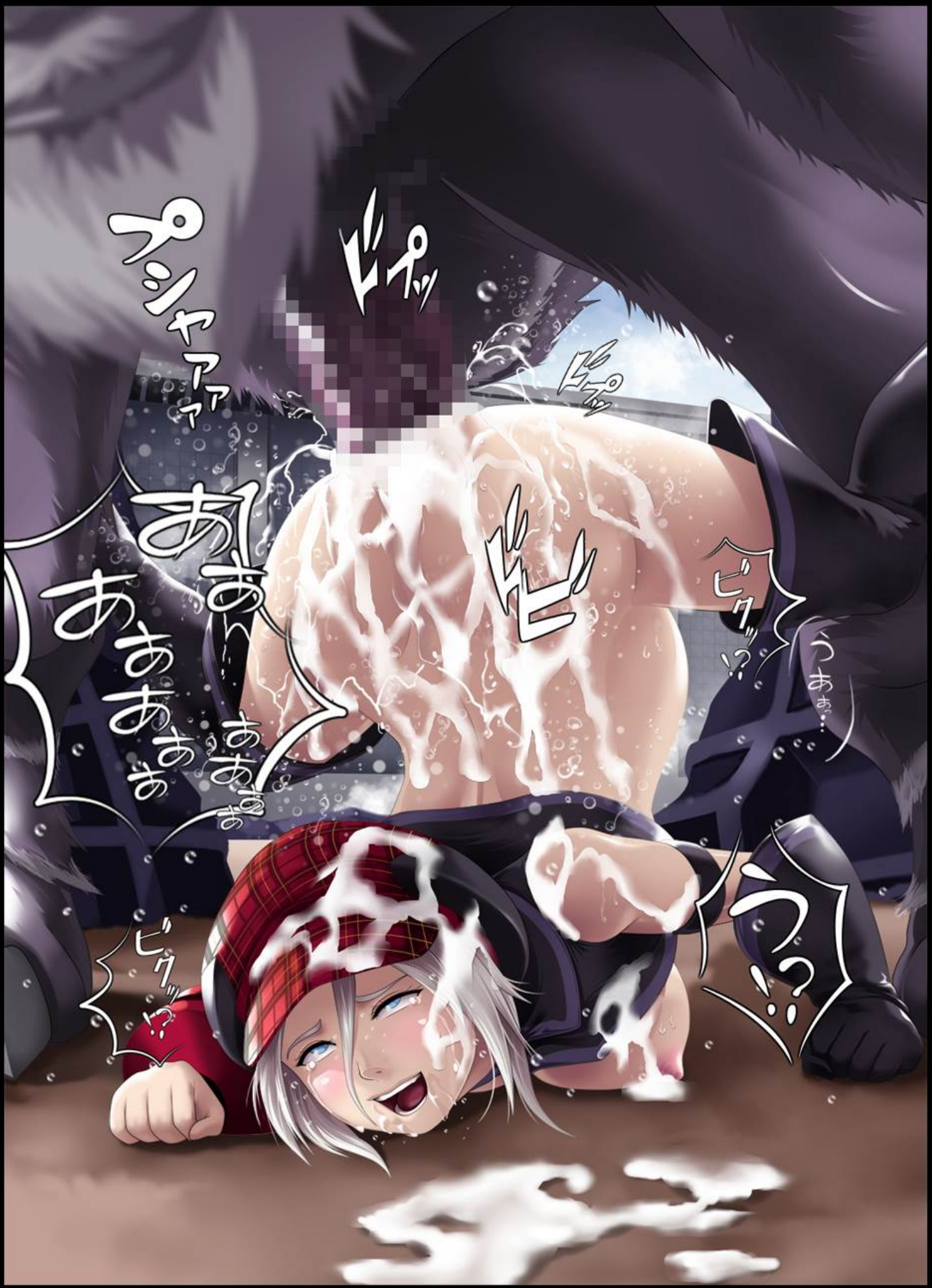
シックザールの決断により極東支部の電力が落とされた
予備電源が備わっている為に照明など生活面での影響は無かったが
システム全体がダウンし再起動まで時間がかかる
だが、幸いにも記者が時間をかけて準備していた中継システムもダウンし
画面にはフェンリルのマークだけが映し出されていた・・・
そしてアラガミ誘導装置も同時に停止・・・
記者が計画した陰謀は全て終焉を迎えていた・・・

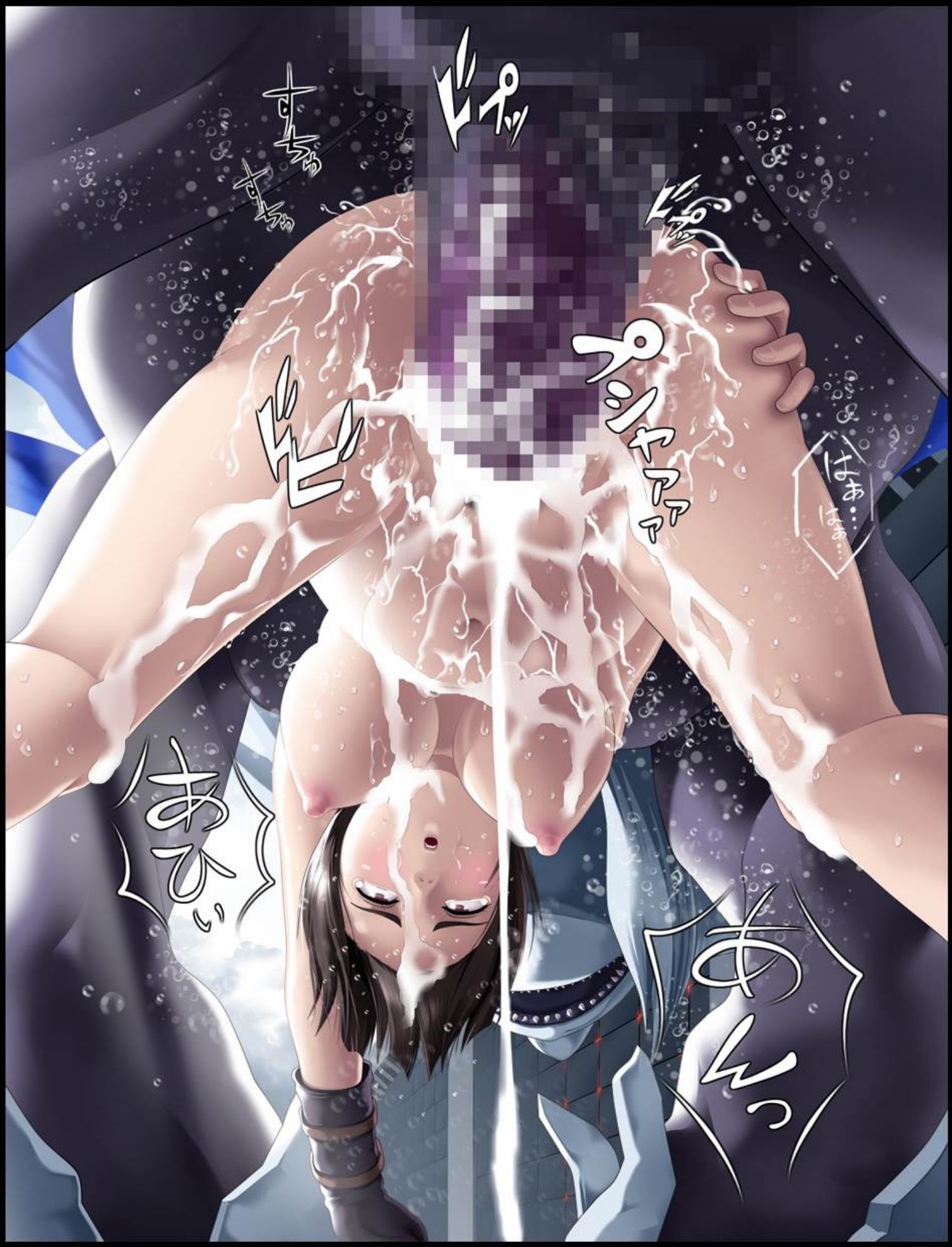
ゴッドイーターが犯される様子を中継されるのは阻止することができたが・・・
現実にアリサとサクヤが今危機に陥っている事態に変化は無い・・・
ツバキはすぐに二人を救出するためシステムの復帰を待っていた・・・
だが・・・心配するツバキ達の想像とは違い・・・
アリサとサクヤは新たな境地へと足を踏み入れつつあった・・・

『あはああぁぁん、パパ・・・ママぁっ・・・すごいよぉっ！！！！』
ピターとの激しい交尾を受け入れ楽しんでいる余裕すら見せているアリサ・・・
「ううああっ・・・ダメぇっ・・・体が・・・おかしいっ・・・私どうしたのっっ！？」
苦痛だったアラガミとの交尾に体が慣れ始めているのか・・・
サクヤは全身に走る感覚を感じ取る余裕が出てきていた・・・
交尾で感じるものは苦痛から快楽へと変わり
サクヤの体は肉棒に対して敏感な反応を見せるようになっていた
「あはぁぁっ・・・気持ちいいっ・・・すごいっ・・・はげしくてっ・・・・・！！？？？」

『あはっ・・・ダメっ・・・イク・・・イっちゃうよぉぉっ！！？』
洗脳により精神的に不安定となったアリサは
純粋に快楽しか感じることができなかった
全身を震わせ唾液を流し・・・
秘部からは大量の愛液が溢れ流れ落ちていた・・・
しかし、アリサに起きていた変化は・・・
自らを守ろうとする防衛本能から生まれてものであった・・・
アラガミに犯されるという耐え難い事実を忘れるために
アラガミに弄ばれることが何よりも楽しいことだと思い込んでいるのだった
そして一度それを受け入れてしまったアリサは
決して抜け出すことのない快楽の中へと入り込んでしまった・・・

次第に目が虚ろになり・・・意識が朦朧としてきたサクヤ・・・
アラガミの激しく野性的な交尾に体力は既に限界を迎えていた
抵抗する気力も残されておらず
サクヤは激しい快楽をただ受け入れ喘ぐことしかできない・・・
「あはあああああぁぁっ！！！！？？？？」
その声に呼応するように・・・アリサも声をあげていた・・・
『あははあああああんっっっ！！！？？？？』
並んでアラガミに犯されるその姿は仲の良い姉妹のようにも見えなくもない
そして・・・
ピターとマーターも二人に呼応するように
同時に射精の時を迎えていた・・・
熱い精液が溢れ子宮へと流れ込むと・・・
二人の表情は一変しその激しい射精に驚いているようにも見えた・・・
大量の精液で二人の腹部は大きく膨れ上がり・・・
二人は歓喜の悲鳴を上げ続けていた・・・


ビクッ!?
うあぁ…
ビピ
ビピッ
ビピッ
プシャアアアア
あああああああああ
ビクッ!?
う!?


ビュッ
すちゃ
すちゃ
ビュッ
プシャアアアア
ビビ
はぁ…
はぁ…
あひぃ
あぁっ

肉棒が引き抜かれると・・・大量の精液が一気に逆流し周囲へと飛び散った
『あはあああぁぁぁ！！！！！！！？？』
「あああああぁぁぁぁぁっっっ！！！！！！？？？」
叫び声を上げ凄まじい快楽に襲われる二人・・・
その叫び声を最後に体力の限界を迎えた二人は
撒き散らされたアラガミの精液の中で横たわる二人・・・
その表情は快楽を味わいつくした満足気なものであった・・・

交尾を終えたピターとマータは・・・誘導装置が停止したこともあり
すぐにその場から立ち去っていった・・・
アラガミ達は交尾の対象であるゴッドイーターを必要以上に傷つけることはない
奴らはまた次の機会を狙っているのである・・・

「ふう・・・凄まじい映像を中継してしまいましたね・・・ですがこれでっ・・・。」
極東支部のシステムダウンのことなど知らない記者は
自らの中継が最後まで放送されたと思い込んでいた・・・

「サクヤさん、アリサさんしっかりっ！？」
「今すぐ医務室へ運ぶわよっ！！」
サクヤとアリサのもとへ駆けつけたのは・・・
以前二人に救出されたカノンとジーナの二人であった
万全の状況とは言えない二人だったが
ツバキから状況を知らされ無理を知りつつ出動を決意した・・・
二人は記者の存在を警戒しつつ、サクヤとアリサの体を隠すと
担ぎ上げ急ぎアナグラへと向かっていった・・・

「ふう・・・戦闘も終わったようですね・・・私も帰るとしますかっ！」
満足気な笑みを浮かべる記者・・・
「止まれっ、お前を逮捕するっ！」
「でしょうね・・・まあ、覚悟は決めておりましたので・・・・・・。」
警備に連行される記者・・・しかし記者には少しの後悔も無いようであった
極東支部全体にスキャンダルな映像を届け・・・
世界中へと広がると確信していた
だが・・・
避難所から出てきた市民達とすれ違う記者の耳に入ったのは
想像と違う会話であった
「なんだったんだろうな・・・あの映像・・・
サクヤさんとアリサさんが泣いて笑ってたけど？」
「よく解らなかったよな・・・あれ。」
「まあ、泣いてるサクヤさんも綺麗だったけどな！」
「うん、アリサちゃんも可愛かったなぁ・・・！」

「ちょっとみなさん・・・どういうことですか・・・何を見ていたんですっ・・・！？」
サカキ博士の迅速な対応により市民達の目に映像が触れたのは
ほんの数十秒ほどであった・・・
しかも作戦の成功に歓喜した記者は喜びのあまり頭が呆然となり
カメラを支える手は大きく震え・・・
映像の全てが二人の顔のアップのまま固定されたまま
中継された映像はほとんど乱れたままであり
市民達は10秒間ほど、笑うアリサと泣くサクヤの映像を見せられただけであった
その事実に愕然とする記者・・・
「そ・・・そんな・・・私の苦労が・・・。」

アナグラ内部では数分間に渡り映像が流れたが
アラガミ襲撃中であった為にテレビを見ていた職員は少なく
ヒバリやリッカをはじめとした女性職員たちの奮闘により多くの画面が消され
また女性職員と一緒にいた男性職員は
気まずさからかすぐにテレビを消しほとんど映像を見ることが無かったようだ
一部の男性職員達の目には触れてしまったが・・・
トラブルの元となるそんな映像を見たと名乗り出る者もいるわけがなく
誰もが瞳の奥に焼き付けただけで話題になることも全く無かった
そして
サカキ博士の適切な対応により映像自体も記録として残ることはなく
すべてが消去され
同時に、記者が密着取材で記録した過去の映像も処分されたのだった・・・

「・・・記者としての立場を悪用した上での作戦妨害・・・
　　お前がフェンリルと人類に与えた罪は重い・・・・・・。」
シックザールの前に連行され処分を言い渡される記者・・・
だがその顔はうつむいたまま遠くを見つめており支部長の言葉は届いていない
記者はフェンリルに対する反逆罪として本部へと送還されることとなる・・・
記者としての免許あらゆる資格が剥奪され
彼が望んだ世界を驚かせるスキャンダルは永遠の夢となり・・・
犯罪者としての名だけが残ることとなった・・・

「・・・あの記者がこれほどの計画を企むとは・・・。」
記者を小物だと侮っていたシックザール・・・
「彼が装置にハッキングできたのは本部からの助けがあったから…みたいだね、」
本部からやってきた幹部達は支部長シックザールの対応に不満を漏らしていた
支部長のメンツを潰すために記者を利用しメテオライト計画の妨害を企てたようだ
「まったく・・・密着取材など私は最初から反対だった・・・。」
「そうだったかな？ゴッドイーターの姿を世界に・・・なんて乗り気だった気が…。」
「うっ・・・そのことは忘れてくれ・・・博士・・・今はそれどころではない。」
「エイジス計画・・・だね・・・？」
「ああ、メテオライト作戦失敗の影響は大きい・・・・・・。」
「失敗？たしかにトラブルは多かったけど、誘導には成功しているじゃないか？」
「そうだな・・・たしかに・・・その点は成功と言える・・・その点は・・・。」
「・・・・・・・・・。」

「まさか私の計画があんな小物に邪魔されるとはな・・・・・・・・・。」

一週間後・・・

「サクヤさんもう大丈夫なんですか！？」
「ええ、いつまでも病室で寝てられないわよ。」
一週間にも及ぶ入院生活により体調を取り戻したサクヤ・・・
サクヤの元気な姿にヒバリも安心した様子である
「サクヤ・・・。」
「あ、・・・ツバキさん！」
サクヤの元へとやってきたのは教官雨宮ツバキ・・・
「今回の件は本当にすまなかった・・・
二度とこんな取材など受けさせないと約束する。」
「ツバキさんのせいじゃありません・・・私も改めて気を引き締め直します！」
上司として責任を感じるツバキと
記者に脅迫され素直に応じてしまった自分自身にも責任があると感じるサクヤ・・・
シックザール支部長も今回の件に関してはかなり反省しており
今後は本部からの人材には注意を払い指令もよく検討すると考えているという・・・
「おお、サクヤ！　もう体調はいいのか？」
「リンドウ・・・ええもう万全よ！」
メテオライト作戦において孤立して戦い続けたリンドウ達であったが
ヴァジュラの群れの一部が極東支部へと向かったことにより戦況は好転し
誰の犠牲も出すことなく敵を殲滅することに成功したのだった
「まさか無事に帰れるとはな・・・本当に感謝してる・・・。」
サクヤの目を見つめ珍しく感謝の言葉を口にするリンドウ・・・
「あら？珍しいわね・・・あなたからそんな言葉を聞けるなんて！」
リンドウの言葉を聞きサクヤも嬉しそうな笑顔を浮かべていた
「まぁ・・・そのなんだ・・・今回はよくやった、これからも頼むぞ！」
「了解です、少尉殿！」
気まずくなったのかその場を足早に立ち去っていくリンドウ・・・

改めて周囲を見渡すと・・・
記者たちのいないアナグラの広さと快適さを改めて感じることができた
密着されていた一ヶ月以上・・・本当に窮屈で辛い日々であったと実感した・・・
『サクヤさん・・・無事に退院おめでとうございます。』
「アリサ・・・。」
サクヤの退院を笑顔で迎えるアリサ・・・
彼女はサクヤよりも早く退院することができたという・・・
共に苦境を乗り切ったことから二人のあいだには強い絆が生まれているようだった
『ところでサクヤさん・・・やっぱり・・・感じてますよね・・・？』
「・・・えっ・・・感じてるって？」
『私は・・・あれ以来・・・体がっ・・・・・・。』
「アリサ・・・あなたもなの？」
『やっぱり・・・サクヤさんも！？』
アラガミに襲われたあの日から・・・体に変化を感じていた二人・・・
激しく高ぶる性欲に気持ちを抑えきれなくなる事が多々あった・・・
『サクヤさんはリンドウさんがいるからいいですよね・・・？』
「ちょっとサクヤ！私たちはそういう関係じゃ・・・！？」

『大丈夫です、サクヤさんっ！私が実践してる解決策があります！』
「それって・・・どういう解決策なのっ・・・？」
アリサに連れられ・・・アナグラから外出するサクヤ・・・
生中継されてしまった経緯から
市民達がどういった反応を見せるのか心配であったが
「サクヤさん任務お疲れ様です！」
「サクヤさん―緒にお食事どうですかっ！　　配給品ですが・・・。」
人々の反応は事件前となんら変わらないものだった
中継された泣くサクヤたちの様子はフェンリル側から説明があり
過去の任務中に起きた仲間の悲劇の瞬間を密着した際に記録されたものであり
それらが誤って放送されてしまったと説明されていた
市民達はその説明で、
ゴッドイーターという仕事の辛い現実を知り同情の声をあげていたのだった・・・
「あの事件がまるで無かったみたいね・・・。」
『さあ、サクヤさんこちらです！』
アリサに案内されたのは・・・裏路地のさらに奥にある酒場・・・
フェンリルに隠れて密造酒などを売っている酒場として有名な場所であった
「アリサ・・・ここに何が・・・えっ！？」
酒場の中には数人の男達が全裸のまま二人の到着を待っていた・・・
「おお、アリサちゃん待ってたぞっ！」
『お待たせしましたっ！』
男達の目の前で服を脱ぎ捨て全裸となるアリサ・・・そして・・・

体中を男達に撫で回され肉棒を嬉しそうにしゃぶり始めるアリサ・・・
「ア・・アリサ・・・こんなことしてたの・・・？」
アリサの変貌ぶりに改めて驚かされるサクヤだったが・・・
その様子を見ているサクヤの体は熱く・・・気持ちが高ぶっていく・・・
「サクヤさんもご一緒しませんか・・・？」
数人の男達に迎えられるサクヤ・・・
「そうね・・・・・・少しなら・・・。」
男達に服を脱がされていくサクヤ・・・
自分でも驚く程に・・・男達を自然と受け入れてしまっていた・・・
「まさか・・・私がこんな女になるなんてっ・・・・・・。」
男達の肉棒を嬉しそうに受け入れるサクヤ・・・

それから数日後・・・
毎日のように路地裏の酒場へと足を運ぶアリサとサクヤの姿があった・・・
しかし・・・
『サクヤさん・・・私・・・もう満足できなくなってしまいました・・・。』
「アリサ・・・あなたも私と同じなのね・・・。」
男たちと数時間の交流を終えた二人だったが・・・
最初の頃に感じていた満足感は既に遠い過去のものとなっていた
アラガミに犯され・・・新たな世界に目覚めた二人・・・
そんな二人が求めていたのは・・・たった1つ・・・
『サクヤさん・・・私いい考えがあるんですけど・・・？』
「・・・いいわね・・・それ・・・！」

自分達の世界を進む二人の背後で進行する野望・・・
・・・極東支部へと帰還する大車博士と進行するエイジス計画・・・
そして訪れる・・・極東支部を揺るがす大事件「蒼穹の月 」・・・
二人はやがて大きな野望へと巻き込まれていくこととなる・・・

END

この度はサークル「DEEPRISING」の作品を御購入頂きありがとうございます！
当CG集に含まれる画像の無断転載　加工を禁止します。
当作品には　基本17枚　差分総数124枚　7つのショートストーリーが含まれています。
感想ご意見などがありましたら　HPのほうへお願い致します。
http://deeprising.sakura.ne.jp/